FLOWLINE FLOWER

flowline flower by HentaiGirls

野沢菜　　日溜。

ジェンガ2003　　みみずの紐

早川一　　片桐天音

もくじ

土手の魚　3
送肉　7
イカロス　15
私の知らないところで幸せになって。だって貴方に不幸でいてほしい。　19
塒（ねぐら）　29
甘い煙に誘われて　61
甘い煙に誘われて 2　81

表紙デザイン ―― 野沢菜／片桐天音

flowline flower

野沢菜
ジェンガ 2003
早川一
日溜。
みみずの紐
片桐天音

土手の魚

野沢菜 (@burasica)

「我々の根気強い話し合いが身を結び、市民団体様にもご理解頂けまして、そのおかげもありまして、この地にも、我々の総合施設を建てる運びとなったわけでありまして……」

二束三文にもならない土地へ執着する老人たちと、私利私欲を蓄えることしか考えていない私企業の縄張り争いについて、うだつの上がらなさそうなサラリーマンがダラダラと話している。

大学の金で旅行に行き、ついでに老人の戯言について感想文を提出するだけで単位が取れる、そう聞いて取った講義の旅行先が、まさか私の故郷だとは思いもしなかった。去年の旅行先は温泉地だったらしいのに、今年から変更になったらしい。

同期がサークル活動やらなんやらでバラ色の学園生活を謳歌しているときに、私は帰省して一私企業のつまらないプロパガンダを聞いている。きっと、これは真面目に単位を取らなかった私への罰なんだろうな。こんなことになるなら、ちゃんと単位を取っておけばよかった。

「我々の施設は、現地住民の方の雇用も創出しておりまして、地域への貢献も出来ているものと信じておりますので……」

いまいち要領を得ない日本語と共に、「施設内で活躍するクルーたち」というキャプションのついた写真が映し出される。写真に映し出されるのは、張り付いた笑顔で接客するクルーたちの日常だ。

普段なら良くて流し見するような退屈な写真たち。その一つに、私は釘付けになった。■■だ。生気が耳から抜けきったような顔に騙されそうになったけれど、間違いない。

あの日、あの土手で別れてから、連絡が取れなかった。どこに行ったのか、なにをしているのか。その手掛かりすら、どうあがいても掴めなかった。もう、忘れようと思っていたのに、まさかこんな場所で出会えるなんて。

「写真を撮ってくださるほど、熱心に聞いてくださり、嬉しいかぎりでございまして……」

そんな社交辞令を言う余裕があるなら、早く話を終わらせてほしい。私の願いもかなわず、講義が終わったのは、終了予定を一時間ほど過ぎた頃だった。

＊

蛍の光を聞きながら、写真を頼りに■■を探す。「地域最大級」と横断幕を掲げているだけあり、とても広い。そのくせ、同じような風景だけが続く。複雑に入り組んでいるわけではないのに、何があるのか、私がどこにいるのかすら分からなくなってしまう。綺麗な迷宮、そんな言葉が似あうこの施設を、いくらさまよっても、■■は見つからない。

この施設は、地獄を現世に再現しようとしたものなのだろうか、そんなことすら考えてしまう。

煌びやかな明かりの下で、衣服に囲まれながら光を吸い取り蠢く従業員たちの中に、■■はいた。あと数分遅ければ閉店時間で追い出されていたと思うと、見つけられたのは奇跡としか言いようがない。

どのような言葉をかけよう、向こうから声をかけてくれればな、なんて悩んでいると、■■の方から声をかけてきた。

「すぐに上がるから、あの土手で待っててくれると嬉しいな」

なけなしの生気をこめたその声は、私の心に、いやに響いた。

＊

「あの土手」は、■■と別れたあの日と同じ姿で、私を出迎えてくれた。記憶の奥底にこびり付いて離れないあの日の思い出が、まるで水を得た魚のように私の脳内を駆け巡る。

「ごめんね、遅くなっちゃった」

土手の水に狂喜乱舞する魚たちが過労死しそうになったころ、■■は私の前に姿を現した。けれど、施設の中で見た■■とは違う。私の知っている■■とも少し違う。

「キミは変わらないね。私も、この町も変わっちゃったから。変わらないで居てくれるのは、なんだか嬉しい」

変わらないで居てくれて嬉しい、思いもしなかった言葉だった。私はなんと返せばいいのだろう。

「昔、この土手でよくおしゃべりしたよね。夜に家をこっそり抜け出してさ。二人だけのヒミツの星座を作ったりもしたよね」

■■が見つめる先には、施設の光で白みがかった空が広がっている。

「あの辺りに……もう見えなくなっちゃったから、名前は思い出せないけれど。楽しかった」

「なら、どうして別れようって、言ったのよ」

絶対に言わないでおこうと決めていた言葉が口からこぼれ出る。これもきっと、私への罰なのだろう。楽をしようとした私への罰なのだ。

「私を攫って欲しい……キミがいる、もっと明るいところに、さ」

「どうして……」

「星座を失くしてしまったから。だから、攫って……ほしい、の」

そういえば、別れる時も強引だった。夜空も、この町も、そして■■も変わってしまったけれど、そこだけはあの頃と変わっていない。そして、私がその強引さに流されるのも、あの頃と同じだ。

もしかすると、この土手に泳ぐ魚だけは、変わらないのかもしれない。これまでも、そしてこれからも。

送肉

ジェンガ 2003 (@NTSC_J)

登場人物紹介

赤身 – 肉
青菜 – 野菜
教授 – 教授

私は肉でできている。毎朝目覚めるたびに、私は重力が肉を歪めるのを感じる。

ベッドから起き上がり、目脂で汚れた眼で辺りを見渡す。携帯電話に入っていた新しい通知は、パプリカ味の豚の栽培に成功したというニュースだった。

半世紀前に疫病が地表から植物を一掃して以来、私の住む内陸では、庶民の食事のほとんどが肉類でまかなわれていた。光合成するものがいなくなったことによる二酸化炭素濃度の上昇による悪天候と慢性的な倦怠感が、どの街をも蝕んでいた。

今朝の食事は鶏もも肉と牛乳だった。肉は消毒されているので、生のままだ。昔と違って、肉を加熱して食べる人はいない。残り少ないエネルギーの無駄遣いだし、水溶性ビタミンの欠乏は生命に関わるからだ。

人類が野菜を食べていた時代について、老人たちが寂しそうに述懐するのを、私は幾度となく聞いてきた。でも、野菜どころか植物を見たことのない私には、それは実感のない昔話でしかなかった。

今日は月曜日だ。大学生の私は、動物の遺伝子を組み

換えて植物の代用品にする研究をしている。このような研究は今や世界中で行われているが、私の師事する教授は日本人としては比較的名の知れた人である。

＊

休み明けのせいか、学生はまだ研究室に来ていないようだった。読みかけの論文があったのを思い出し、モニタの電源を入れたところで、

「赤身（あかみ）さん、いいところに来た。これを見てごらん」

教授が珍しく興奮した様子で、A4の羊皮紙の束を手渡してきた。たどたどしい英語で書かれており、ところどころに赤ペンでメモ書きがされている。

「これはね、昨日発表された論文です。深センの南方科技大学の研究でね、前々から、注目していたんだけど……」

「ついに、動物の肉からほうれん草を作ることに成功したらしいんだ」

「ほうれん草、ですか」

「ほうれん草は重要な葉物野菜で、かつては世界中で食べられていたんだ。私も子供の頃に一度だけ、おひたしを食べたことがある」

「動物でほうれん草を作る研究は今までにもたくさんあってね、といっても、どれもまあ、ぱっとしなかった。にもかかわらず、この研究では食感や味まで、ほぼ、完全に再現しているらしい」

「ほー……それで、何の動物から作るんですか」

教授は表情を変え、深呼吸した。

「それなんだけど……この論文にはあえて書かれていない」

「え」

「が、著者の他の研究から察するに、どうやら……」

「あー……」

「人間らしい」

＊

教授の言うとおりだった。件の論文は、ぱっと見ただけではよくわからないが、研究者が読めばヒトに対する遺伝子組み換えを行っていることがわかるようになっていた。

このことがニュースサイトで記事にされ、一般人の知

るところになったのは、それから二週間後のことだった。著者は逮捕され、供述を残している。

「私は今でも、自分のしたことを誇りに思っている。ほうれん草の生産体制が整えば、世界中の食卓に、かつての彩りが蘇る」

「人間を人工的に生み出したり、その遺伝子を操作したりすることを、生まれてくる子供への虐待だとか、人権侵害だとかいう人がいる。しかし、普通のやり方で親が子を持つことと何が違うのか？　私は私の子供たちを並の親以上に愛している。その理由は苦労して生み出したからではなく、私の子供だからに他ならない」

実際、その子供たちは、体の表面がほうれん草である以外は、通常の人間と変わりがなかった。ほうれん草は毎日、羊の毛のように収穫することができた。

＊

それから二年がたち、私は大学院生になっていた。ほうれん草のことなど、もうすっかり忘れていたのだ。

青菜（あおな）が入ってくるまでは。

＊

青菜も大学院生だった。引越しが遅れたとかで、五月になってからやっと研究室にやってきたのだ。わざわざ遠方からうちの大学まで来るだけあってい、他の学生よりも研究熱心で、教授ともすぐに打ち解けたようだった。

私は比較的研究室に長居するタイプなので、青菜と他愛のない世間話をする機会は多かった。それでも、秘密を打ち明けられるほどの信頼を得ているつもりはなかったのだ。

「一緒にトイレ行かない？　……赤身さんには、話しておきたいと思ってたから」

「ん？　ああ、トイレね、行く行く」

不思議な誘いだったが、机から動きたくない一心で尿意を我慢しながらモニタをぼーっと眺めていた私は、すっくと立ち上がり、言われるがままについていった。

「私、実はサイボーグなんだ」

「へ？」

「見て」

青菜はおもむろにシャツをまくり上げ、腹部を見せた。

臍のあたりから、濃い緑色の葉が何本か上に伸びていた。
「青菜さん、これって」
「ほうれん草。……前、中国に留学しに行ってた時、幹細胞を少し分けてもらったんだ」
私は一瞬、言葉を失った。青菜の覚悟と行動力に驚いたからではない。初めて生で見た野菜が、炭酸ガスに停滞させられていた私の脳髄に、鮮烈な印象を残したからだった。美しい、という言葉が適当かどうかはわからない。しかし、他の言葉が見当たらなかった。
「……なんか、いいね」
「でしょ。これ、食べられるんだよ。お肉と一緒に塩振ってチンすると美味しいの」
「へえ……」
さっきまで神秘だったものが、急に日常に引き下ろされて、私は少し混乱した。美味しい、というけれど、どんな味か私には見当もつかない。
「そうだ。赤身さんも食べてみる？」
たった今思いついたようなことを言う割には、はじめからそう言うつもりだったみたいな、固まった意志を感じさせる言い方だった。
「えっ、えーと……いいの？」
安全性とか、確認したいことは他にもないではなかったが、別に青菜を疑う理由もなかった。ちょっとした秘密を共有したのだ。私が食べれば、私も青菜だけが知る秘密を持つことになる。青菜は秘密の均衡を保ちたいのだろう。
「もちろん。嫌だったら無理にとは言わないけど」
「嫌じゃないよ、むしろ興味があるっていうか……えーと……じゃあ、あの、お願いします」
「ふふ、じゃあ、今日は常夜鍋をご馳走しましょう」

＊

青菜の住む家は、私のアパートとそう変わらない、1Kの単身向けの一室だった。
しかし、私の家と決定的に違う点が一つあった。青菜の家には、電磁調理器と小さな雪平鍋があった。
一人暮らしで加熱調理を行う人は珍しい。それも、普通の人が持っているのは電子レンジくらいだ。鍋を見た

のは母の実家以来だった。
青菜は慣れた様子でほうれん草を根本からちぎり取り、水道の水でさっと洗った。鍋に昆布と豚バラ肉、そしてほうれん草を放り込み、水を加えて塩を振った。
「常夜鍋ってね、毎晩食べても飽きないから、常夜鍋っていうんだって。本当はお酒を使うらしいけど……」
米を発酵させてつくる酒は、それはそれは美味しいものだったと、祖父もよく言っていたものだ。
電磁調理器の電源を入れた。ジーとやかましい音がする。
「ありがとうね、今日、来てくれて」
「いやいや。こちらこそ、どうも」
「ずっと誰かに言いたかったんだけど、信頼できる人がなかなかいなくてさ」
「……そんなに信頼して大丈夫なの、私のこと……」
「うん……いや、信頼っていうか、純粋に赤身さんと仲良くなりたかったっていうか」
青菜の行動のリスクから判断するに、社交辞令ではないようだった。これはずいぶんと好意を持たれているのではないか。
「たはは……それはありがたい」
そうこうしているうちに、鍋が沸騰した。
「じゃあ、いただきましょうか」
青菜は皿に薄めた氷酢酸を注いだ。
具を箸でつまみ、酢酸に浸してから口に運ぶ。私も青菜に倣った。
一口目に感じたのは、初めて経験する風味だった。酸味と肉の旨味が、後から追ってくる。
「これ、おいしいね」
「でしょ。よかった、自分以外にもおいしいと思ってもらえて」
「うん、本当においしい。……また頂きに来てもいい？」
青菜はとても嬉しそうな顔をして、
「もちろん！　毎日でも来て！」
外へ出ると、もうすっかり夜だった。今まで退屈だった**夜空**が、今夜は少しコントラストを増していた。
それから、数日に一回青菜の家で夕食をとるようになった。古い資料にある様々なレシピを試した。
調理をし、食べることは、こんなに楽しかったのか。人

と会話をしながら食事をするなんてことを、私は今まで全くしていなかったのだ。
幸せな日々だった。しかし、それはほんの束の間のよろこびでしかなかったのだ。

＊

発作は突然だった。いや、厳密に言えば、兆候はあったのだ。
八月の日差しは昨年よりさらに強烈になっていた。朝だというのにうだるような暑さの中、私は青菜の姿を見つけた。
「おーい」
「あ、赤身……」
「ちょっとちょっと、大丈夫？」
「大丈夫、だけど……ちょっと水、もらえる？」
私は鞄の中の水筒を手渡した。
「はあ、喉が渇く……」
返ってきた水筒は空っぽになっていた。
「とにかく早く大学に行って涼もう」
「うん……」
大学にはなんとかたどり着くことができた。青菜のほうを見ると、不思議なことに汗を一滴もかいていない。
「青菜、病院に行ったほうがいい。連れていこうか」
「ううん、大丈夫。それより早く実験をして、データを集めなくちゃ」
青菜が行っている研究について、私はよく理解していなかった。

＊

次の日、青菜は昼過ぎになっても研究室に来ないばかりか、電話をしても応答がなかった。心配して家に行くと、玄関は開きっぱなしになっていた。
中に入ると、そこに青菜の姿はなかった。
見慣れた緑色の葉が、ベッドを覆い尽くしていた。
私は親友の死をうまく認識できなかった。
緑色の布団の上に横たわると、去年までずっと好きになれなかった、蒸し暑い夏の匂いがした。

イカロス

早川一 (@vaginaeye)

【まんてんの虚無】

あの娘ひとりで泣いている まんてんの虚無 降り注ぐ音

【切れはし】

いろんなことを口にするのをためらうようになってしまった

こんなおとなになりたかったわけじゃないのに

『ようじょの手記』より

【from me 2 u】

luv

【ススめ】

もう手に入らないのだと諦めることが必要なのです。悲しむことを恐れることはない。悲しむことは前へと進むために必要な一つの手順にすぎないのだから。

【海山】

これは個人的な感覚である。

海に行くと、そこでは私は独りっきりで放り出されてしまったような寂しさを抱く。しかし、山に行くと、何ものかに深く包み込まれているような安堵に包まれる。

【世のしんり】

なにものかを手に入れることができるかのように錯覚していたから、手に入れることができないと気づいたときに（手に入れることができなかったときに）落ち込むのかもしれないが、そもそも手に入れることなどできないのだからそんなことで落ち込むのは時間の無駄である、とアナタは言った。

【イカロス】

金平糖に手を伸ばす。掴み、手を開くと崩れた灰があるのみ。大玉を頬張れど苦く、涙の一粒。近寄ればよく見える。盲には関わりなし。

夜の空を見て「綺麗」と
呟く彼女が眩しくて、羨しくて
私はそれを、綺麗だとは思えなかったから
遠い空の向こうの星を手にすることはできない
けれど
その星を他の全てから隠してしまおうと思った

＊

なぜ学生のうちから決算報告やら予算折衝やらをやらされているのだろう。学校が社会について学ぶための場所であるとはいえ、不平等極まりない職場環境など今体験させずともよかろうに。黄昏を過ぎ、紫に染まる空を窓越しに眺めながら荘野周（そうのめぐる）はリノリウムの床を荒々しく進む。部活動に励んでいた生徒もすっかり退散している。先程会議室を辞したときも警備員が巡回していたので鍵を閉めるのをそのままお願いしてしまった。

そのまま校門へ向かえば良かったのだが、何となく教室へと足が向いた。三日程前にチャットアプリに表示され、すぐに削除されたメッセージが脳裡に浮かんだからといって、そこに彼女がいるとは限るまいに。――本当に？

果たして、流花（るか）は教室にいた。

「……まだ教室にいたんだ。もう最終下校時刻だよ」

「知ってる。まだ家に帰りたくないから此処にいたの。できればずっと帰りたくないけれど」

頬を膨れさせながら流花が言う。イマドキ、街に繰り出さずに学校で時間を潰す女子というのも中々いないのではなかろうか。周であれば駅向こうの美術館にでも行っていただろう。璃々（りり）であれば少しスレてきた女子大生でもナンパしてよろしくやっている。

「そう。でも、いられないんだから帰るよ」

「――訊かないの？　理由」

だって、見当はついているし。そんな言葉を呑み込む。この分かり易い友人は思春期真っ只中で、理解されたい

私の知らないところで
幸せになって。
だって貴方に不幸で
いてほしい。

日溜。(@hid_alma1026)

し理解されたくないのだ。人のことは言えないが。
「だって、私を待っててくれたワケじゃないんでしょ。じゃあどうでもいい」
それに――まあ、なんだ。拗ねるのは彼女の専売特許ではないのである。

＊

「どうでもいい」――そう言われて、血管の耐える圧を超えていきそうなほど強く頭へ血が昇るのを感じた流花は、周へ向けて開きかけた口を、しかし噤んだ。彼女を不機嫌に、そして十数年来馴染んだ家を他人の家のように変えたやり取りを思い出したからだ。
流花の家庭は数日前急変した。それまでは何かが変わる、終わる、そんな影さえなかったのに。
「うん、帰る」
震えそうになる声色を抑えつけながら、なんとかそう言った。

＊

父次郎太は娘の流花からみても「人ができている」と思う。怒声を聞いたのは幼い頃母がいない隙に流花が台所から包丁を持ち出してお飯事に使おうとしたときくらいで、その時でさえ怒鳴った後に一度流花に謝ってから説教を始めたのである。自宅の洗濯機や食洗機が一段グレードの高いものであるのに気付いたのは幾度か友達の家に遊びに行ってからであるが、流花が生まれた頃で父が強く意見を通して購入したらしい。家事も積極的に行う、行事や行楽にはきっちり仕事を休むといったことが決して世間の当たり前でないことを、流花は中学校あたりまで知らなかった。
母咲恵は、その性質を近しいもので表すのなら「気分屋」だ。「今日は天気が良いから散歩に行こう」と言う日もあれば、別の日には「今日は天気が良いから家でゲームしてようか」などと言い人を混乱させることも珍しくない。父曰く、「基準は完璧に一貫している」とのことらしいので、表にそれが出てこないだけなのかもしれないが。
そんな父と母の間柄について、流花は「母がその気になったときに父にアタックしたのだろう」と思っていた。

父の方から母へアタックしたと聞いて吃驚してお気に入りのお茶碗を取り落としてしまった。「そんな二人の間に生まれた自分は奇跡のような愛の結晶に違いない」と、そんなことを考えて暫く悶えていた。でも、確かに思ったのだ。思っていたのに。

＊

「咲恵さん。別れましょう」
「……何の話？」
夕食の席で、父がそう切り出したとき、流花の頭はその言葉を解釈できなかった。母も眉を顰め、父に問う。
「離婚しましょう」
父の方から母へアタックしたと聞いて吃驚して
お気に入りのお茶碗を取り落としてしまった。
「そんな二人の間に生まれた自分は奇跡のような
愛の結晶に違いない」と、そんなことを考えて
「上手くいっていると思っていたんだ。でも、そうでもなかったらしい」

父は申し訳なさそうな顔でそう言った。
「僕のできる限り努力をした。愛そうとしていたし、愛していた」
次郎太の声に温度は無かった。熱さも、冷たささえも感じないということがこんなに恐ろしいものだと知らなかった。
「そう。なら仕方無いか」
母は残念そうに言った。そこにも哀しみ憎しみの色すら無い。流花の頭は今度こそ真っ白になった。「仕方無い」？自分達の関係は、「仕方無い」で終えられてしまうようなものだったのか？　母にとっても、そうなのか。努力って？　頑張らないと愛せない？　私は頑張らないと愛せないものなの？　もう愛せないなら私は二人の愛ではないの？
その後はあまり記憶していない。そういえば、「どちらが流花を引き取るのか」に関して、流花の前では多分話していなかったように思う。
父が言っていた「愛する努力」という言葉だけが、流花の中に溶けずにいつまでも残っていた。

＊

荘野周は真っ当なものが好きだ。上位に入るであろう大学院卒の父と、専門学校卒の母を持ち、大型の休みになると孫の成長を楽しみにする両祖父母の元へ遊びに行き、勉学は国語と英語と生物が得意で数学はケアレスミスが目立つが嫌いではない。そんな環境で育って真っ当なものが好きな人間に育った。

では荘野周は真っ当だろうか？　――否である。真っ当な人間というのは当たり前のものが当たり前に好きだから真っ当なのだ。真っ当だから好きなど、マジョリティの志向では有り得ない。

流花との出会いは私立中学校の一年次の入学式だ。同じクラス、隣の席での入学式。実のところ、そのときは彼女のことをそんなに意識してはいなかった。中学校に通う生徒など、皆ある程度は真っ当だったから、木を見ることなく森を見て満足していた。

それが変わったのは初の授業参観のとき。自分の子供を観にきた父兄の割合としては母親が多かったが、父親の姿も無い訳でもない。周の家も来たのは父親だった。その日を休むために少々無理をしたのか多少くたびれた様子だったが、その日を休むために少々無理をしたのか多少くたびれた様子だったが。

授業の始まる直前、クラスメイトの会話として、そのときには前後の席になっていた流花に互いの親はどれなのかと話しかけると、彼女が後ろに手を振り、中肉中背で穏かな目をした次郎太がそれに応えた。

――アレは何だ？　流花の向く先を認識した瞬間、周の世界は、暫し停止した。周はごく真っ当な家庭に生まれ、真っ当な社会で生きてきた。彼女自身が周囲とどこか違うことはこの頃自覚し始めていたが、それでも周囲にあんなモノはこれまでいなかった。

次いで流花が周の親を尋ねていたが、周は生返事しかできなかった。

最初の授業は国語、宮沢賢治「雨ニモマケズ」。「サウイフモノ」が、いた。

とはいえ、別に異常者性愛に目覚めたというのでもない。彼女の興味はここで流花へと移った。木偶からこんなに真っ当なものが生まれたのか、育ったのか。「代数で

分からないところがあるの」などと言って授業後に話しかけ、元々入学式以来近くの席なのにあまり話しこむようなことの無かった――誰とでもそうであったが――流花と親友となるのにかかったのは二日程だった。

新たなこの友人を流花の両親は当然歓迎した。苦手科目を教えられることで流花の成績が上がったことや、市街をうろつくよりも家で大人しく遊ぶことの多くなったことも理由である。

周もまた、流花と交友するうちに変化があった。怒り、泣き、笑い、学び、少しだらけたり。真っ当でない要因が近くにいながら真っ当な流花は周にとって常に惹きつけられる存在となっていた。当たり前のものは何もせずとも当たり前で、自身が関わる意義も意味もない。でも、奇跡のようなこの友人は、このままでは壊れてしまうかもしれない。

周にとって、募らせた巨大な感情は愛や恋などと象る必要もなかった。いっそ稚気すら感じさせるそれが、溢れ出すほどになったのは中学を卒業し、同じ高校に合格して暫くして。

「欲しい」と。

＊

幸いにも通学路付近は街灯も多く、ほぼ川沿いのため見晴しもそれなりに良い。多少夜に差しかかっていても女子学生だけで歩ける程度だ。

そろそろ別れる時間だ。何気ない風で周がジャブを打った。

「サルトルとボーヴォワールって契約結婚とかいって、婚姻届とか同居とかしなかったらしいよ」

「ふーん」

周としては結構際どい部分を攻めてみたつもりだったが、不発。面白くない。やはり、家が近付いてきたことのストレスで気もそぞろのようだ。

「ここでお別れだけど……家に来るの？」

「……ダメ？」

「いいけど。許可はとってね」

「う……」

二人で遊んでいたゲームで、モンスターの体力がギリギリになって塒へ帰ろうとする場面を思いだした。ここだ。

「ねぇ、何があったの？」

流花の瞳が一気に涙を溜めた。そして、決壊する。

「パパは！　愛する努力じゃ足りなかったみたいだって！」

言っている内容は支離滅裂で、急に聞かされても訳が分からない筈だ。だから、そんな表情を作りながら、これまでにない程弱りきった彼女の姿は――そう、そそる。そんなことを心の裡で周は感じていた。突然の事態に傷付いて、当たり散らして。実に真っ当な反応だ。

「私は！　パパとママが愛しあって！　それで生まれてきたんじゃ……ないの？」

流花の叫びはその剣幕と裏腹に小さなもので。揺らいでいるのだろう。急に父と母が他人になるなんて。二人の愛の証が自分である筈。じゃあ、その愛がなくなったら？　なんて酷い父親だろう。娘の存在理由をこんなにボロボロにしてしまうなんて。やっぱり引き離して正解だった。

「私が流花を愛しているから、大丈夫だよ。ずっとずっと、大丈夫」

＊

高校生活も半ばを過ぎ。周は行動に移ることにした。アレはどうせ定刻にこの場所を通るだろう。通勤の電車で事故があったとしても、途中で通り魔に刺されようともこの道は同じ時刻に通るのだ。悍しい。

そして、次郎太が周のいる道へさしかかった。

「あれ？　荘野さんだよね。どうしたんだい」

「実は、流花さんのお父さんにお話ししたいことがありまして」

「僕に？　流花のことかい？」

「いえ、次郎太さんのことです」

思い当たる節が無いといった顔の次郎太を歩いて数分の公園へ促す。流花の家はずっとこの辺りにある筈なので、この公園もかつての遊び場だったのかもしれない。そう思うと胸の裡の昏い炎が勢いを増した気がした。

「それで、僕のことって？」

公園の自販機で買ったお茶を差し出しながら、次郎太が尋ねた。

「ええ。端的に言うと――貴方がいると流花さんに良くない影響が出るかもしれないので、消えてください」

「……端的にというか、急にそんなことを言われてもね」

次郎太が困ったような笑みで返す、

「そういうところです」

笑みが、凍った。

「木偶の坊に、人を育てるのは無理だと思います。人間は人間と成長していくべきです」

「……娘の友人といえど、流石に怒るよ？」

「だから、そういうところです。もう怒っていなきゃいけないところですよ、ここ。怒るべきと判断してから怒るなんて壊れてますよ」

「どうやら君は僕をロボットか何かにしたいみたいだけど、僕にだって感情はあるし、思わず怒ってしまうときだって――」

「感情はあるんでしょうね。包丁を持った流花を怒ったとき、怒ることのできる自分に安心したんでしょう？」

「……何を」

「ロボットなんて言ってないじゃないですか。木偶の坊って言ったんですよ」

この数年で弱点の見当はついていた。完璧すぎる程に完璧な人間。度の過ぎた人格者。

「人間らしい」そういうとき、どんな風に連想をするだろうか。何事にも理性的で、穏やかで、欲はなく、いつも静かに笑っている？　それとも全ての物事に大いに怒り、悲しみ、愛を高らかに謳う？

馬鹿馬鹿しい。人間は人間。そのままで良かろうに。人間らしくなどと考えることこそが人外への一歩ではないか。

そうありたいと望みながら、自分はそんなものではないと否定する矛盾。そんなものに触れさせていたら、流花のような真っ当な娘が人間でいられないかもしれない。流花が穏かに微笑むだけの木偶になる姿を想像して、思わず震えた。

さて、もう一押しかな。

＊

「私がずっと愛するから大丈夫」そう言ったけれど、きっと彼女の求める愛は私の抱くものとは違うのだろう。永遠の愛が欲しいと言う彼女はしかし、止まり木を探しているだけなのだ。だが、欲しいというのなら解けなくなるくらいに、溺れるくらいに与えるだけだ。元気になれば彼女は当たり前の幸せに飛び立ってしまうから。

そして「その手を何時振り払ったら一番彼女が傷付くだろうか」そんなことを考えている。通学時に駅のホームに迫る電車と線路の隙間にふと吸い込まれそうになるように。

或いは――そう、或いは最期までこの気持ちを抱きながら側にいることこそが、最大の裏切りになるのかもしれない。

「顔、拭けたよ」

そうして私は、普段通りに彼女に並ぶ。

塒（ねぐら）

蚯蚓の紐 (@mimizunohimono)

その日、川端泰葉（カワバタヤスハ）を朝早くから叩き起こしたのは、嘔吐（えず）くほどに強烈なアンモニア臭だった。

アスファルトに寝転がったままの彼女はこの匂いを嗅ぐたびに、アルコールに踊らされたであろう昨晩の自分を叱責している。だがそれは多くの状況でその場に限った反省であり、日を跨いでその経験が生かされることはほとんどない。

事実、自動販売機のみが二十四時間稼働しているこの無人酒場はあまりの立ち小便の悪臭から犬も近寄らないことで有名だったが、彼女がここで一夜を明かすのは今年に入ってから既に五回目だった。

「寒ぅ……」

今年の一月や二月頃は路上生活者を苦しめた夜の冷え込みだが、三月に入る頃には路上の水溜まりも凍らなくなってきた。まだお世辞にも温かいとは言えないが、泰葉のような飲んだくれが仮に帰宅に失敗したとしても、凍死するリスクは格段に低下したのである。

泰葉はお天道様に向けて大きく伸びをし欠伸を吐き出すと、ぼさぼさに乱れた赤髪を手櫛で整え、黒のジャンパーに張り付いた小石を払い落とし、ポケットの中身を一通りあさった。

現れたのは百円玉に、十円玉に、ボロボロの手帳と、スロットのコイン。そして噛み終えたガムを包んだレシート用紙。

次に口から飛び出した、

「……迎え酒でも呑まんと、二日酔いでやってられへんわ」

という独り言には、酒飲みとしての矜持に驚嘆すら覚えさせられる。

とは言え、昨晩のどんちゃん騒ぎで吹き飛んだ彼女の懐事情を考慮すると、飲酒という娯楽からは一見すると程遠い。

だがここ西成の釜ヶ崎と言えばドヤの街・あいりん地区。消費税もどこ吹く風の極端な価格破壊が起きている事実は周知されている通りである。

泰葉は自販機に百円玉を押し込み、取り出し口から「すごいもワンカップ十二パーセント」を取り出すと、息もつかせずアルミ蓋をベロリとひん剥きゴクリ、そいつを一口で呑み干してしまった。

「ぷはーっ……」
これは今年に入ってから既に三杯目の迎え酒である。
「ん？」
空きっ腹に芋焼酎が染み込みほどよい酔い心地になったところで、泰葉は今年に入ってからまだ聞き入れたことの無い喧騒を聞きつけた。
「いや、結構です。本当に結構ですってば……」
「まま、そう言わんといて！　自分、仕事探してまっしゃろ？　絶ッ対、楽に稼げまっせ！」
声の出処は職業安定所の方からだ。前者は若い女性、後者は水商売をあっせんする男性と言ったところだろうか。
泰葉はワンカップの空瓶をゴミ箱に投げ込み、「建物内飲酒禁止」の張り紙を横目にズカズカ乗り込んでいくと、職安の薄暗いエントランスで件の男女の姿を発見した。周囲のプータロー達も何事かと、そちらに注目を寄せ始めている。
「おねーさんの見た目でしたら、月に百も二百も堅いんとちゃいますか？」
「いや、だから別にお金には困ってませんから……」
「これ、なーんばしよっと。こんの女衒（ぜげん）めが」
一見すると泰葉は、悪質な業者から絡まれる女に対し助け舟を出す善良な市民にも見える。だが彼女の判断は別に善意や良心に基づいている訳ではなく、後述するようにこれも彼女にとっては単なるビジネスの一環に過ぎないという事実をここでは付記しておく。
「まーた、おぼっこい娘っ子に悪絡みしよってからに」
「あれ！　朝もお早うから、泰葉さんやありまへんか」
「わざわざ泰葉さん呼ばわりとは、えらいけったいやのう！　背中がムズムズするけん、ヤスでかまへんわ。で、その娘さんなんやけど……」
なるほど、確かにこの風貌ではそちらを勧めたくもなる、などと失礼極まりない感想が泰葉の脳裏を過った。
白のシャツワンピースをベージュのダッフルコートで包み薄手のニット帽を被ったその格好では、娼婦（パンパン）を名乗るにしても、西成より梅田でふらついた方がより稼げるだろう。歳は二十五、六、栗毛の長い髪と長身がよく似合う切れ目の美人ではあるが、その自信の無さからはどことなく頼りない印象を受ける。持参するキャリーバッグ

が観光客の体を醸し出してはいるものの、本当に観光するつもりならば踏切（あいりん）の先ではなく今頃新世界に向けて足を運んでいるはずだ。
泰葉はわざとらしく、男に向かって小声で囁いた。
「……実は今朝、ウチの方でポリさんから連絡もろててな」
「警察（ポリ）ィ？」
「この子、最近お勤めを終わらしたばっかりやさかい、西成の方でちゃーんとキレイな日雇（しごと）いを紹介したってほしいゆうてな、直接に頼まれてますねん。なんやったら、電話して確認してみましょか？」
もちろん出まかせだ。
酔い潰れていた泰葉が今朝連絡を受けることもできなければ、そもそも西成警察署との直通電話そのものが存在しない。
「へえーっ！　ほんまでっか。あちゃー、えらいすんまへん。そらウチみたいな悪どいもんが、商売っ気出したらあきまへんわなー……」
あっせんする男の顔に陰りが現れたのは、紹介手数料の計算で叩いていたそろばんに横槍が入ったからであろう。苦笑いを浮かべ、あたかも粗相を恥じるような体を装ってはいるが、その目の奥は笑っていない。
無論この男も、どうせ泰葉のつまらないハッタリであろう、と睨んではいる。だからこそ、商売の性質上万が一があってはまずいのだ。
もしこの女を半ば無理矢理連れて行った後に、泰葉が警察に通報したらどうなるだろうか。あるいは本当に警察からの依頼でなくとも、その筋の人間から匿うための方便だったとしたらどうだろうか。
泰葉という女の不気味な立ち位置によって、彼が得られるであろう僅かばかりの報酬はわざわざ危ない橋を渡るほどのリスクに見合わなくなってしまうのだ。
「えらい邪魔しましたなぁ。ヤスの姐さん、ほなまた」
無駄な労力はかけるまいと、業者の男は足早に去っていった。野次馬のプータロー達も興味を失うといつもの定位置へと戻っていき、場違いな格好の娘だけがその場に残った。
「あの……助けてくださってありがとうございます。ヤス……さん？」

「いやー、間一髪やったなお嬢ちゃん。せやけど、ほんまに嫌やったら走って叫んででも逃げなアカンよ」
「はい……」
「そーんな楽して稼ぐみたいなうまい話は普通あらへんから。あの男もタチが悪いもんやさかい、お嬢ちゃんほどの上物やったら、明日の今頃には飛田のちょんの間で、綺麗なおべべ着て客待ちしとったんとちゃいますか。へへっ」
「トビタ……チョンノマ……？」
「あぁ、ええからええから。気にせんといてな」
　どうもこの辺りの土地柄に詳しくないところを見ると、着きたてほやほやの東京モン（おのぼりさん）らしい、と泰葉は納得した。
「で、お嬢ちゃん。これからどないしましょ。お仕事などをお探しで？」
「ええ……はい、そうです。職業安定所と聞いて、何か仕事があるのかな、と」
「アカンアカン、もう朝九時やで？　あいりんの日雇いゆうたら、お天道様が昇り始めることにはもう仕事を始めなアカンのや」
「そっ、そんなに早いんですか……」
「それにお嬢ちゃん、体格的にも土方のキッツイ仕事には向いてないやろ？　そら雇う側も同じ給金払うんやったら、娘っ子よりはガタイのいいアンちゃんを雇うやろなぁ。他の日雇いと同じように仕事探してたら、ええ物件が見つかる頃には日が暮れてしまいますわ」
「そ、そうでしたか……」
「ついといで」
「え？」
「ええから。仕事探しとるんやろ？　朝飯でも奢ったるから、ついといで」
「は、はぁ……」
　うまい話はないと言った直後にうまい話を提示する女の信頼性に疑問性を抱きながら、女はとぼとぼとついていった。

＊

「ま、入ってな」
「あ、お邪魔します……」

　職安からキャリーバッグを引きずって約二分。泰葉が案内したその建築物はあいりん地区の中心街に軒を構え、「エヌ・ピー・オー法人・釜ヶ崎職業無料案内所　あいりんの塒（ねぐら）」という看板を表に掲げている。窓ガラスの内側には「女性や障がい者の強い味方・無料朝食付き」と白インクの手書き文字で書かれ、僅かばかりの集客能力を通りに向けて発信していた。
「あいりんの……つち、とき？」
「ハハ、読めんやろ？　うちも読めへんかったけど、『ねぐら』ちゅうんやて。あいりんのドカタには読めへんやろうに、どないしてこんな名前になったんか不思議やわぁ。ささ、上がって」
　泰葉はホコリを被った灯油ストーブの電源ハンドルを捻ってから、奥の黒ずんだ台所に立つ。
「朝メシ、うどんでええか？」
「あ、はい。頂きます……」
「よっしゃ」
　泰葉はジャンパーを脱ぎ捨てて手を洗い、エプロンを上からかぶると、ポットの中に残っていたお湯をそのまま寸胴鍋に空けた。
「お嬢ちゃんは東京から？」
「えぇ、はい。今朝着いたばっかりで……」
　鍋のお湯がチンチンに沸いた頃合いを見計らって、お湯の中に冷凍うどんを二玉突っ込む。隣の雪平鍋では既にだし汁が沸き始めており、そちらには冷凍ネギの塊が放り込まれた。
「ここは釜ヶ崎地区……いわゆる『あいりん』に流れ着いた女性、老人、身体障害者などなど、比較的『社会的弱者』に分類される輩に日雇いの仕事をあっせんする、えーっと、トクテイヒエイリカツドウホウジン、ちゅうたかな？　そんな施設や」
「はぁ……」
「なんやなんや。ウチみたいなフーテンのその日暮らしが、そないな社会奉仕の精神を遵守していることがそんなにも意外かいな」
「あっ、いえ、その、そういうわけではないんですが……」
　泰葉は茹で上がったうどんを一旦ざるに揚げ、使い込まれた二つの漆器にきちんと等分する。それぞれに卵を

一つずつ投入し、鰹節をパラパラとふりかけ、上からアツアツのだし汁を注ぎ込んだ。湯気が立ち込めたら、即席うどんの完成である。

「ほれ、朝食。卵入りの出血大サービスや」

「あ、ありがとうございます……」

しばらくは喋ることもなく、淡々とうどんを啜る音だけが部屋に響いた。お互い久方ぶりに空腹感が満たされたからか、至福のひとときを過ごしていたのである。

＊

「で……どれぐらいや？」

「と、いいますと？」

「お嬢ちゃんはどれぐらいの期間、ここで羽を伸ばす予定なんや。一日？　一週間？　一ヶ月？　それとも一生？」

「そんなには……長くても一週間程度だと思います」

「さよか、そら安心したわ」

「安心、ですか？」

「実のところウチらの団体の目的はな、新しくあいりんに訪れた新参者を早いところ追い返して、よその街に定住させることなんや」

「えっ、どうしてですか」

「そらーあいりんで何年も暮らしとったら、いつまで経ってもうだつが上がらへんし、たいして生活が楽になることはないからや。それにあいりんの労働者が増えれば、ただでさえ少ない日雇いを奪い合うことになるやろうし、おまんまの食い扶持が減ってだーれも幸せにならへん」

「ずいぶんと割り切ってますね」

「あくまでトクテイヒエイリカツドウホウジンの活動やからな。ウチらも仕事の案内さえ終われば西成市から手間賃はもらえるんやから、最後まで拭かんでもええケツやったら拭く意味もあらへん」

「……ごもっとも、ですね」

「ほな腹も満たされたし、ぼちぼち適当にお嬢ちゃんの手続きも済ませしょか。お名前は？」

「……阿部、阿部公江（アベキミエ）と申します」

「何か身分証明書は持っとる？」

「はい、今財布から……あっ！」

「ん？」

「ええっと、すみません、今はちょっと、その……今は財布に入れ忘れていたみたいで……」

「ふーん……ま、ええわ」

「えっ、むしろいいんですか？」

「ここやと運転免許証もマイナンバーカードも持っとる方が少ないさかい。まぁ、また思い出したらでええで」

「はい、そうさせて頂きます……」

「とはいえ阿部はんやら公江はんやら……ってのもむず痒いやろ。ウチは適当に自分のこと、なんとなくお嬢様っぽいさかい、適当にお嬢って呼ばしてもらうで」

「あ、はい。お好きにどうぞ……」

もう既に大分呼んでるじゃないか、というツッコミは公江の胸中に留まったようだ。

「ほんで紹介が遅れよったな。ウチは川端泰葉。ヤスハでもヤスでも好きに呼んでもろうてかまへんで。エヌ・ピー・オー法人からあぶく銭をかすめながら、あいりんの新人案内人としてあくせく働いとるところや。現在独り暮らし、恋人募集中のアル中で、もう今年で二十八になる」

「えっ！　意外と歳近いんですね。私、今年で二十六です」

「おー、あいりんではかなーり珍しいぴっちぴちの若者やな」

「いやいや、そういうヤス姐さんこそ」

「はっはっは、ところでお嬢」

「はい？」

「もちろん今のは、見た目よりも若かった驚きなんやろな……？」

「やだなぁ、そんなの決まってるじゃないですか」

「はっはっはー……」

「はははは……」

お互いに乾いた笑いをこだまさせているが、両者があいりん地区における希少な若者であるという点は事実である。二〇〇五年の人口分布統計によると、あいりん地区における四十歳未満の人口構成率はわずか十五パーセントにも満たない。超高齢社会と化しているあいりん地区において、彼女らはまだ赤子にすら満たないのだ。

「はい、書けました」

「ご苦労さんっと」

こうして泰葉は、阿部公江に関する名前、前住所、年齢、性別など、最低限必要な情報だけ埋められた労働申請書類を受け取った。本来であれば顔写真付き身分証明書の番号控えや、電話番号などの記入を行政から要求されているが、ここではそういった情報が記入される場合の方が珍しい。念の為に西成署から手渡された全国指名手配リスト・家出行方不明の顔写真に目を通したが、似通った顔の女性は目に留まらなかった。

「よっしゃ。それじゃお嬢はこれから『あいりんの塒』の保護下にある。何か困ったことがあったら、気軽にウチまで連絡してな。ちゃーんとお上が定めた非営利団体やから、こちらから衣食住に関してあっせんすることはあっても、基本的に金銭を要求することはあらへんから」

「それは何よりです」

「ほな、次は衣食住の衣や」

「えっ。でも別に私、着替えは持ってきてますし……」

「阿呆たれ。今着てるのと同じようなもんやろ？　そないにヒラヒラした服着とったら、商売女かと勘違いされてまうわ。朝みたいな女衒のおっさんに捕まるわ、脂ぎったおっさんから『なんぼや？』って聞かれるわ、ポリさんから職質かけられやすくなるわで、ええとこなんてまるであらへん。あいりんに住む上で、悲しいことに若いおなごのオシャレほど無駄な足掻きもないんや」

「そ、そうですか……」

ひょっとして全て体験談ですかね、という余計な一言は公江の胸中に留められた。

「まずジャージにジャンパーで色気を落とす。常にスッピン。金は一箇所の財布に収めず、足の裏やカバンに分割して入れておく。ここまで基本中の基本や」

「ずいぶんと厳重ですね」

「とにかく手持ちの現金は最小限にしとき。とりあえず今日のところはウチのお古を貸したるさかい、給金が入ったら、明日にでも向かいの古着屋でクッソみたいにダッサいジャージとジャンパーを買うてきんしゃい。で、食は後にまわして、次は衣食住の住。特にこだわりが無ければ、上のドヤに住んでもらおか」

「はい、それでお願いします。上、ですか？」

「そ、このビルは二階三階がドヤになっとってな。周辺

のドヤ価格帯と比較しても、格安で泊まれる。少しレトロを通り越して廃墟に近づいとるが」

泰葉は窓を少し開け、上に向かって叫んだ。

「おぅ、おっさんおるかー！」

「おぅなんや、ヤスか」

白髪混じりで熊面をしたヒゲモジャの大男が、半纏姿にステテコという出で立ちで、のっしのっしと外階段を降りてくる。

「ウチの新人、泊めたって。一日なんぼ？」

おっさんは指をスッと一本立てた。

「一週間やと？」

立てる指がスッと五本に増えた。

「なんやおっさん、コッスい商売しとるの。お嬢はトンキンから流れ着いて苦労しとるんやし、もうちっと負けたらんかい。あ、せや。ウチの部屋二人で泊るんやったらどうや？」

小指と薬指が閉じられ、指は三本に減った。

「なるほど、ほなそれでいこか」

「あ、あの、つまり……？」

「あぁつまりな、ウチと二人部屋やったら一週間で三に負けといたるって。これでええかな？」

「分かりました、三万円ってことですね」

「そうそう……へ？」

「あ、それなら大丈夫ですよ。今すぐ手持ちでも支払えるので、別に前払いでも……」

泰葉とヒゲモジャのおっさんは思わず顔を見合わせた。一拍、間をおいてから、泰葉の下品な笑い声がドヤを響かせる。

「ぶっ、ぶっひゃっひゃっひゃ！」

「えぇ……」

「いっ、一週間に三万って……自分、おっさんのドヤがどんな高級旅館やおもてんねん！」

「え？　は、はぁ……」

「あ、安心せぇ、お嬢。三万もいらへん、三千円で十分や」

「え……えっ！？　一週間宿泊で、たったの三千円？　本当に経営成り立ってるんですか、それで？」

「くっくっくっ……今度は煽られとるで、おっさん」

「じゃかぁしい、余計なお世話じゃ」

一応泰葉は一人部屋の方がよかったか公江に訪ねたが、夜は心細いのでどうか一緒に居てほしい、と彼女は答えた。

「部屋内で薬物・危険物を取り扱わない」「部屋内の貴重品は自己管理」云々の同意書に一筆書くだけでレジストレーションは完了し、即チェックインとなる。

「ほいじゃお嬢ちゃんの荷物、部屋まで持ち運ぶで。よっ……とぉ！」

「おっさん、無理せんようにな。またギックリでも再発させたら、しばらく寝たきりやからな」

「じゃかあしいわい、まだまだこれでも若いもんには……うっ！」

おっさんは突如体を震わせたかと思えば、直ちに動作を停止し、キャリーバッグの持ち手を緩めてしまった。

「あっ！」

「ほら、おっちゃん！　いわんこっちゃない」

支えを失ったそれは階段に打ち付けられ、衝撃で緩くなっていたファスナーが緩み中身がぼろりと一気に漏れ出した。泰葉は慌ててておっちゃんの救護に向かい、公江は慌ててその中身へと近寄る。

「痛ツゥ……あぁ、ほんま堪忍、ほんま堪忍なぁお嬢ちゃん。おっちゃんぎっくり腰でな、お嬢ちゃんの大切な荷物を落としてしもうたわ……」

「えっ、いっ、いや！　大丈夫ですよ、うん、全然」

「おっちゃん、少し布団かぶって休んどき。またぶりかえすとアカンから。荷物はウチが運んどくで」

「すまんのぉ、ヤス。ほんで、おっちゃんはお嬢ちゃんの荷物から、何を落としてしもうたんかのぅ。壊れてたら弁償もするけんのぅ。おっちゃんよう知らんが、何かゲームのカードっぽい見た目をしとったが……」

「えっ！　こ、これですか？　あぁ、はい、大丈夫です。ほら、こんな感じで、プラスチックのケースで保護してますから」

そう言って公江は、プラケースで保護された三枚のカードを少しだけ泰葉の前に見せると、すぐに鞄へとしまいこんだ。

草原に咲く一輪の黒い蓮。

ピラミッドの前で耳を塞ぐ男性。

道に佇むのっぺらぼうの骸骨三人組。

どれも妙に古めかしく、どこか幻想的な光景が部分的に切り抜かれたカード達は、泰葉の好奇心を捉えて離さなかった。

「へー、これどしたん？」

「ええっと、実は親戚の子がこっちに住んでいまして、彼から借りっぱなしだったカードを返そうかと……」

「それでそんな古臭いカード、一枚一枚プラケースにしまっとるんか。はぁ、何や知らんがお嬢はマメやなぁ」

「一応借り物ですからね。ははは……」

公江の笑い声は、妙な乾きを帯びていた。

＊

部屋は和式の四畳半によって構成されていた。本来一人住まいを想定している空間なので、流石に二人が入ると窮屈さを感じざるを得ない。

内装はちゃぶ台、布団、テレビの三点セットで構成された、可もなく不可もなくといったところの一般的なドヤである。備え付けの古びたお茶パックと使い捨ての歯ブラシはサービスらしい。

とりあえず上着を脱いで、薄手のセンベイ布団の上にゴロリと寝転がった公江は、次第にウツラウツラと睡魔に襲われた。

「ほれ、寝とる場合ちゃうで」

「うわっぷ」

そのまま横になろうとした公江の顔面に向けて放り投げられたのは、くたびれた一枚の手ぬぐいだった。

「お嬢にはお昼から早速看板娘となって、あくせく働いてもらわにゃあかんからのう。これから客先に出るんじゃ、まずは銭湯行くで」

「銭湯……せ、銭湯ですか！」

「おぉ、どしたん？」

「私、入るの始めてです！」

「なんやお嬢、銭湯も入ったことないんか。こらひょっとしたら、ほんまもんの箱入り娘かもしれへんな」

「はい！　私、今まで箱入り中の箱入りだったんですよ」

「えらいテンションの振れ幅が妙なやっちゃな……」

＊

カポーン、という洗面器の響きが風呂場の隅々まで染み渡った。

銭湯で肩まで浸かった時に喉から漏れ出る声と言えば、老若男女大差なく「あ」に濁点の入ったような発声として広く知られている。箱入り娘からはそこから輪を掛けて上品にした艶っぽい声が漏れ出したが、泰葉からはそこから一回り濁らせたようなダミ声が漏れ出した。

彼女らの柔肌から疲れを可視化したかのような気泡が吹き出すと、水面へシュワシュワと浮かび上がり、大気中へと霧散していく。

あいりん地区に銭湯は数あれど、ここ和光浴場は炭酸泉の庭園露天風呂付きという、あいりんらしからぬ高級感をもった内装で広く知られている。仕事終わりの時間帯に皺くちゃの老婆から揉まれて芋洗い状態にされようが、この時間帯から優雅に朝風呂を堪能しようが、入浴料金は常に一律で四百四十円だ。特にお昼前はほとんどの日雇いが出払うため、泰葉は二日酔いが覚めた頃合いを見計らい、ここで実質貸し切りとなる朝風呂をよく堪能していた。

「はぁ……たまりまへんわ。人生初銭湯はどないなもんや、お嬢？」

「た、たまりまへん、ですね……こんなに熱いお風呂始めてです」

「ははは、さよかさよか……んえっ！」

泰葉はその驚嘆を、思わず発声という形で外に漏らしてしまった。

九割が脂肪質で構成され胸部に位置する豊満な公江のそれは、なんと水面で浮力により微細な単振動を繰り返していたのである。それは決してやましい欲求からではなく、今後人生の見聞を深めるであろう知識欲に基づき、泰葉の視線を捉えて話さなかった。人体の一部が物理的にそういった動作も可能であるという紛れもない事実を、泰葉は二十八年間の人生において始めて目の当たりにしたのである。

「どうかしましたか、ヤスさん？　ちょっと視線がやらしいですよ」

「いや、なんでもあらへん。ちょっと驚かされただけやさかい、なんでもないんよ……」

「……ところでヤスさん」

「はいはい、なんでござんしょ」

「入る時に、入場の係員さんとごそごそ話してたのは何かあったんですか？」

「係員さん……？　あぁ、番台の若旦那の事やな。あいつは昔からの幼馴染でな、ちょいとニュースでも見ながら世間話しとったのもあるけど、あれはな、番台さんに財布を預けとったんや」

「財布、ですか……？　そういえばヤス姐さん、部屋を出るとき私には貴重品を置いていけ、って言ってましたよね」

「せや、どうせ預けることになるしなぁ」

「とはいえロッカーにも鍵が付いてますし、そこまで神経質に……」

「いやいや、あんなコソ泥のネグラみたいなロッカーに、貴重品なんか突っ込んでみぃ。ものの五分も立たずにパチられてまう……盗まれるで」

「え、本当ですか？」

「ホンマもホンマ。どうもここのコソ泥は全ロッカーの合鍵をこさえとるさかいに、鍵かけてようが基本的に安心はできへん。番台のおっちゃんに預けるのが一番安全ってことやな」

「は、はぁ……」

「まぁこれに限ったこととはちゃうけどな。日本には日本の常識があるように、あいりんにはあいりんの常識があるんや。公園に住むホームレスのテリトリー、炊き出しの実施時間と場所、ドヤの選び方……。当然ながら良習も悪習もある。せやけど、全部ひっくるめてあいりんの習慣やとうちは思うとる。だから一部暗黙の了解になってしもうた習慣を新参者に教えるのも、ウチらの大事な仕事ちゅうわけやな」

「おぉ、何だかかっこいいですね」

「よせやい照れやい。ほな次は、お嬢の身の上でも聞かせてもらおか」

「私の……ですか？」

「せや。要は何があって、あいりんまで流れ着いたんかっちゅう話や。この仕事の楽しみの半分は、これを聞くところやさかい。あ、内容がヘビーやったり犯罪スレスレ

やったり答えたくなかったりしたら、適当にボカシ入れてもろてかまへんで」

公江はしばらく考えた後、ぽつぽつと語り始めた。

「……とある小さな会社で、経理部の部長秘書を勤めていたんです」

「ほう」

「結構周りからは世渡り上手だって、褒められたんです。二十二で入社して、四年勤めて、大抜擢だって……」

「順風満帆やないかい」

「ところがその、経理の部長から熱烈なアプローチを受け始めたところから、どこか歯車が狂い始めたんです。その方妻子もいらっしゃって家庭もあるのに……」

「あら、禁断のオフィスラブ」

「ある日酔っ払った勢いで、彼は何度も土下座して、どうかやらせてくれって。そのうちにその、なんと言いますか、一線を超えてしまいまして……」

「ふーん、お嬢もずいぶんと安い箱入り娘やんな」

「言い訳したい所ですが、事実その通りなので何も言えませんね。それで一線を超えてから始まったのが、私に対する粉飾決算の指示です」

「あれま」

「その会社の業績は良かったんですが、税金逃れのために売上高を抑えた方の帳簿を表向きにしておけと。別に赤字を黒字に偽っているわけじゃないんだから、悪いことじゃないんだって、延々とその行為の正当性をベッドの上で私に言い聞かせたんです。今思えば当たり前ですけど、抱くところから含めて全てあの男の手のひらで踊らされていたんですよね、私」

「それで、用が済んだらポイちゅう話か」

「ご明察ですね。あとはマルサの介入が噂されて、責任追及が行われそうになったらあの男は急に手のひらを返して……。あんな低予算ドラマみたいな展開が、まさか私自身に降りかかるなんて思ってもいませんでしたね。それでいよいよ今日から本格的な調査が始まると聞いたので、持ちこめる荷物だけ持ち込んで、昨晩夜行バスに乗り込んだんです。だから今は溜めてた鬱憤を消化して、人生の有給休暇中です」

「いやいや、そらーお嬢アカンやろ。嫌疑者の逃亡と見

做されて、余罪が追求されるやつやん」

「詳しいですね、ヤス姐さん」

「お姉さんドラマ好きやから、こういうのよく知っとるで」

「でもいいんです。これから捕まるとしても、このままどこかへ逃げたかったんです」

「ほなら、どないしてあいりんに流れ着いたんや？」

「昔ニュースで、殺人犯が潜伏していたっていう報道があったんです。だとすれば、逃げる人間が向かう先としてはピッタリなのかな、と」

「そら悪い印象植え付けられとるなぁ」

「そうですよね……すみません。地元の人にはこんな理由で来てしまって、申し訳ない限りです」

「まぁ事実やししゃーない。まずはあいりんのイメージを切り替えていくところからや」

「……でも、今回ので十分に思い知りました。もうコリゴリですね」

「粉飾が？」

「男ですよ」

「そっちかいな」

「散々口説き文句を垂れ流すのは口先だけで、気まぐれで抱きたい時に抱いて、利用価値がなくなったらポイ。私はおもちゃになりたかったんじゃありません」

「そらーたまたま悪い男に引っかかっただけやろ。お嬢ほどのべっぴんさんやったら、男も選り取り見取りとちゃいますん？」

「そんなことないです。私、今の会社に入社するまで男性と触れ合う機会がほとんどなかったんです」

「ほう……高校は女子高で、大学も女子大みたいな」

「その通りです。だから私の中での男性は、お父様か、少女漫画に出てくる王子様の二種類。まだよく知らぬ殿方という存在そのものに、この歳になるまで神秘性や憧れを抱き続けていたんです」

「自分、童貞の対極みたいな女やな……」

「道程？」

「あぁ、かまへんから続けて続けて」

「でも今の考え方は真逆です。つくづく自分が違う方の性別に生まれてよかったと、心の底からそう思ってますね」

「ふーん……」

泰葉は両手の指を互いに組み込んで裏返し、うんと大きく背伸びをした。指先から水滴が零れ落ち、頬を伝って首筋を滑り落ちる。

「ウチは、逆やなぁ」

「逆、ですか？」

「そ。ウチはガキの頃から男に、特におっさんになりたかったんよ」

「それはまた……年頃の娘さんが語る理想とは到底思えませんね」

「いやいや、あいりんちゅう街はおっさんの街やから、何だかんだでおっさんが住みやすいようにできとるんよ。お嬢はこの銭湯の入り口に貼ってある貼り紙、知っとるか？」

「知らないですね、今日始めて来たんで」

「よう聞いとき。『二十代三十代は男に成りたい。四十代五十代は男でありたい。六十代七十代は男で死にたい。』」

「何だか格好いいですね」

「せやろ？　誰が言ったか、何の目的かも知らんけど。ウチは小学生の頃からこれを見て育ったもんやから、早くこうなりたかったんや。女に生まれたからこそ、男勝りで、男よりも男らしい自分に成りたかった」

「あー……その気持ちは、何となくですが、少し分かります」

「ほんまに？」

「えぇ、女子高でもそういう感じの子は多かったんで。やっぱり周りが女の子ばっかりだと、男の子っぽい女子が人気だったり……」

「ちゃうでちゃうで。そないなチャラチャラした、王子様的な理由とは間逆なんや」

「そうなんですか？」

「周囲から求められてその姿になるわけじゃなく、ウチはただ周囲に溶け込みたいっていう、どうしようもないほどに消極的な理由やから」

「消極的、ですか……」

それまで喧しさを前面に押し出していた泰葉の口から出てきた消極的という単語は、妙に公江の心を捉えて離さなかった。

お互いが沈黙しそうになった頃合いを見計らったのか、おおっと、無駄話が過ぎてもうたな、などとわざとらしく呟き、泰葉は浴槽から抜け出した。

「ぼちぼち仕度を始めなアカン時間や、お嬢、もう上がるで。ここの名物ブローバスはまた今度にしとこか」

「は、はい……ところでヤス姐さん」

「どしたん」

「その、この時間から始められるお仕事っていうのは、一体何なんですか？」

「何や、まだ知らんかったんかいな！」

「そらヤス姐さんが教えてくれないからですよ」

「それもそうやな！　これからお嬢には、箱入り娘にはちょいと厳しいであろう、地獄の激務をしてもらうで」

「じ、地獄……」

「その名も……」

「その名も……？」

「弁当屋や」

「弁当屋……？」

＊

「おばちゃーん、助っ人連れてきたで」

「おぉ、ヤス。ちいと遅かったんとちゃう？」

泰葉と公江が弁当屋「まんぷく」に到着し、店に佇むしわくちゃの老婆からいきなり手渡されたのは、まず遅刻に対するお小言と、次に年季の入った黄ばんだエプロンだった。

「新人さん？」

「は、はい。そうです」

「おにぎりセットは百円、日替わり弁当は二百円、大盛りが三百円。ええか？　体に染み込ませて叩き込んどきぃや」

「は、はぁ……」

相手に物言わせぬ老婆の凄みに対し、公江は生返事を返すことしかできない。

「ほな開店！」

開店と同時に現れたのは、午前中の勤労を終え空腹に身悶える大量の日雇い労働者達であった。

「はい、大盛り一つ、こっちは日替わりやな。そっちはおにぎり二つ、普通一つ、あ、新人さん大盛り補充しといてや」

「は、はいっ」

「大盛り一つ！」
「はい、大盛り一つ入りました！」
「おにぎりまだ来とらんのやが？」
「はいっ、直ちに直ちに！　あの、ヤス姐さん！」
「はい、おにぎり一つ！　……なんやお嬢？」
「私、何でこんなにもみくちゃにされてるんでしたっけ……？」
「決まっとるやろ、おまんま代を稼ぐためや。はい、大盛りおまたせ！　手が止まってるでお嬢！」
「は、はぃ……」
　それからもひっきりなしに来客は続き、泰葉と公江がようやく一息つく頃には陽も傾き始めていた。
「よし、山場も超えたし休憩や。新人も好きなん選んで、胃袋にかっこんどき」
「は、はい……休憩入ります……」
　公江は適当な弁当を一つ選び、店の厨房へと持ちこんだ。奥では古びたテレビがガーガー音をかき鳴らしながらお昼の番組を放送しており、泰葉はそいつとにらめっこしながら飯を胃袋にかっこんでいる。

「お疲れ様です」
「おっ、お嬢もお疲れさん。初めてにしてはなかなかの手際やったやな。経理職で慣れとるからやろ」
「そ、そうかもしれませんね。仕事柄激務はよくあることなんで……」
「そうやった。お金の扱いは慣れたもんやったな」
「いえ、普段は紙の上でしか会計しませんし、こんなに百円玉を扱ったのも人生で今日が始めてです」
「そないなもんなんかな」
「そういうもんですよ……。あら、このお弁当、よく見ると二百円とは思えない高クオリティですね」
「せやろ？　おばちゃんが毎日スーパー玉出で食材仕込んで、赤字覚悟で作っとるんや」
「へぇ、味もなかなか……。きっと梅田のオフィスビルとかに出店したら、毎日ビジネスパーソンが買いに来るんじゃないですか」
「ちゃうちゃう。あいりんで出店するからこの値段設定なんや。だからこそ数多く売っていかないとやっていけんのや」

「実際、飛ぶように売れてましたからね。いつもこんな感じなんですか？」
「せやな。これが毎日続くんや」
「ま、毎日ですか……」
「とは言え激務は昼だけ、朝は早起きせんでもええし、夜はぶらついててもかまへん。まかないもついとるし、キツイ土方仕事よりはいくぶんか楽や。これは釜ヶ崎で昔からよく言われてるわけでもなく、ウチが勝手に広めてる格言やけど」
「それってただの格言じゃないですか」
「あいりんの酒は命の水、あいりんの弁当は生命線言うてな」
「生命線？」
「食べる方はとりあえずおまんまにありつける、売る方はとりあえずおまんまの食い扶持は稼げる。せやから釜ヶ崎には弁当屋がぎょうさん連なっとるちゅうわけや」
「へー」
「ほなごっそさん」
「えっ。ヤス姐さん、いつの間に」

「早寝早食い早グソも芸の内や。ほな先に仕事戻っとるで」
「あ、ヤス姐さん」
「なんや」
「パセリ残してますよ」
「じゃかぁしい、気にせんでええわそんなとこ」

＊

　えらく間延びした防災無線の放送が、午後五時を告げた。
「今日も終わりか」
　気がつけば陽もとっぷりと暮れ、あいりんの町並みに夜の帳を下ろし始めた頃、弁当屋はひっそりとその暖簾を下ろす。
　この弁当屋に限らずあいりん地区における労働形態は概ね日雇いであり、その日働いた分の稼ぎはその日の終わりに老婆から支給される。裏を返せば明日またここで労働できる保証は、どこにもない。
「はい、ご苦労さん」
　泰葉と公江に手渡された茶色の封筒には、樋口さんがちょこんと一人佇んでいた。公江が額を見て少し複雑な

表情を浮かべたのは、彼女が秘書を務めていた頃の時給換算と比較してしまったからであろう。これでも時給はあいりんでも高水準の部類に含まれる。

「おばちゃんおおきに。よし、じゃあ呑もか！」

「いいんですか、貯金とか宿代に回さなくちゃ……」

「いーやっ、今日ぐらいええねんええねん。宵越しの銭は何とやら言うやろ。今日は初日祝いやしパーッと呑も呑も」

「そういえばヤス姐さん、アルコール中毒じゃないんですか？」

「一日ぐらいかまへんかまへん。お医者様もお天道様も見てへんうちにや」

「大丈夫かなこの人……」

まず泰葉が案内したのは、弁当屋から歩いて数分のところに位置するホルモン串焼きの「やまき」だ。まだこの時間だというのに、既にべろべろの客がカウンターにたむろしごった返していた。店の親父は黙々と鉄板で串を焼き、ホルモンの焦げる香ばしい香りがもくもくと店外へ漏れ出す。

「ここはな、あいりんの酒呑み共が一軒目に訪れることで有名なんや。ホルモン、キモをハイボールでサッと流し込んで、次の店に向かうのが乙ってもんやな。ほら、席空いたで」

「なかなか味があると言いますか、いい雰囲気ですね」

「お嬢はいける口か？」

「お酒ですか？　まぁ人並みには呑めますよ」

「よっしゃ、今日は三十円奮発してビールにしたろ。おっちゃん、ホルモンとキモを二本ずつ。あとビール二本もらうで」

「えっ、勝手に取っていいんですか？」

「そういうシステムやさかい。後で自己申告で勘定するから問題あらへん」

「酔っ払ったら忘れそうですね……」

「ほいお嬢、まずはホルモン串や」

「え、ええっと。どうやって食べるんです？」

「食い方も何も。串を取ってこのタレにつけこんで、口に放り込んで、ビールで流し込むだけや。あ、串カツのソースと一緒で二度漬けはアカンで」

「なるほど、これはニンニクが効いてて美味しい……」

「次はキモ。焼き上がったキモはもうニンニク醤油で味がついとるけん、少しレアな状態で口に放り込んで、ビールで流し込んだらええ」

「これも確かに美味しい……口の中でトロッといきますね」

「おっちゃん、お代はここ置いとくで。よっしゃ、お嬢。食べ終わったら次行こか」

「えっ！　ヤス姐さん、早くないですか？」

「まぁ一軒目やしこんなもんやろ。缶ビールは歩きながら呑めばええぇ。それに早く行かんと、次に行く店が満員になってまうで」

「せ、せっかち……」

「ええか？　せっかちは悪いことやないで、覚えとき」

＊

「二軒目はここ、たつ屋。ちぃとお値段は張るが、ここに来たらホルモン鍋を食わざるを得ない……」

「とはいえお鍋一人前で九百円ですからね、都内だと普通に二千円超えたりしますよ」

「ほら、こないにして豆腐、にら、もやし、キムチ、キャベツ、そして主役のホルモンがグツグツに煮えたぎって、一つの鍋を形成するんや」

「この香りは流石と言いますか……食欲をそそりますね」

「せやろ。けどまだ食べたらアカン。煮え立つまで呑みながら待つのが乙ってもんや。この店はにごり酒が日本酒と同じ値段やから、口当たりがよくて酔いやすいにごり酒を呑むんがベストや。つうことで、おばちゃん、にごり二つ」

「詳しいですね」

「伊達に長くは住んでへんよ」

「ヤス姐さんって、あいりんに来てから長いんですか？」

「なんや、ウチなんかに興味でも湧いたんか」

「ふと気になったもので」

「面白い話でもあらへんよ。ウチは十八で高校卒業して、それからずっとあいりん暮らし。もう数えで……十年になるなぁ」

「それは古株ですね」

「そんじょそこらのおっさんにはまだまだ負けるで。そ

れに、高校までは別のとこにおったからな」
「どこに居たんです？」
「大阪城のすぐそば……大阪市の児童相談所や」
「えっ、あっ……」
「いやいや、言うてもそないに気にする必要はあらへんよ。普通におかんがポックリ逝って、普通におとんから虐待されて、普通に児相に保護されて、普通に新聞配達で生計を立てていただけや」
「ちょっとちょっと、普通に重い話じゃないですか」
「まぁ今はどっこい生きとるからな。人生結果オーライちゅうことで」
「あっ、ひょっとして……」
「ん、どしたん？」
「いえ、気に触ったらすみません。ひょっとして、朝の男に成りたかった、って話も……」
「まぁそんなところや。確かに理想の子育てをしてくれるようなおとんに出会えなかったから、っちゅうのも理由の一つかもしれへんなぁ。あるいは……」
「あるいは？」
「家に女をとっかえひっかえ連れ込んでくるような毒親を、一人の男とすら認めたくなかったのかもしれへん」
「それはまた……何と言いますか、奥様を亡くされたショックが大きかったのは分かりますが……」
「だからウチは男に成りたかったというより、正しくは、そういう男よりも頼りがいのある女に自分が成りたかった……のかもしれへん。こうやって人を支援して、人から頼られる立場の仕事をしとるのも、何の因果かその延長になっとるしなぁ。そういう意味では天職に恵まれたのかもしれへんし、神様のの様仏様にも感謝せんとあかんな」
「そうですよね！」
「何や急に」
「昔がどうであろうと今が幸せならどーでもいいんです。私も会社の人間から束縛されていた頃に比べると、今の方が断然生き生きとしてますよ」
「え～？　それは困るわな～、犯罪者と一緒にされてまうわ～」
「ちょっと、大声で止めてくださいよ。まだ重要参考人

ですらないんですから」
「冗談冗談。さて、ぼちぼち食べ頃かな」
「そうですね、美味しいうちに食べましょう」
「こうやってほろほろのホルモンを口に突っ込んで」
「はふ」
「にごりでキュッと流すんや」
「はふはふ……ほふ、ほほう、これはなかなか……」
「あっ、お嬢。締めはチャンポンか雑炊、好きな方を選び」
「ちょっと気が早くないですか、まだ一口目ですよ」
「ええからええから、どっち？」
「うーん……じゃあ、チャンポンにしましょっか」
「ほなウチは雑炊にして、はんぶんこしよか。おーい、おばちゃーん」
　泰葉は注文しに店主の方へと向かい、そのままテレビを話のつまみにしながら、やいのやいのと雑談を始めてしまった。
　一方で公江はノンストップでベラベラ喋る女からやっとのことで解放され、安堵から一息つき、ホルモン鍋を一人で黙々と食べ始めた。公江はそのうちに、泰葉がいなくなるとこんなにも周囲の喧騒が聞きとりやすく、あまりにも自分が一人であるという事実に驚かされてしまったので、にごりをちびちび呑みながら、昨日までの嫌な出来事をできるだけ早く忘れようとした。
「お嬢、卵と飯とチャンポン持ってきたで……お嬢？」
　寝息を立て始めた公江を、泰葉は少しの間寝かしてやることにした。

＊

「ということでホルモンで腹も膨れて、お嬢も仮眠をとってスッキリしたところで」
「いや、逆に酔いが冷め始めたんで、私は若干鬱々してきたといいますか……」
「今日の〆は、安くでしこたま酒が呑める宅飲みや。公園呑みもなかなか乙なもんやが、まだちぃと寒い季節やしなぁ。ウチは昨晩もやっとったが、まぁお嬢に風邪でもひかれちゃ困るけんね」
「ヤス姐さんも、もう少し自分の身体を労ってくださいよ……」

「ちなみにカップ酒を買うときは、コンビニよりも自販機の方がごっつ安うなっとるからよう覚えとき。ほら、ここも鬼殺しワンカップが百十円や」
「さっきから賞味期限切れのジュースとか一リットルの牛乳とか、一般社会からは逸脱した商品ばかり目に付きますね。あいりんの自動販売機って、一体どういう管理になってるんでしょうね……」
「さー知らへん。適当に安く仕入れた液体でも詰めといて、とりあえず売り切れるまで放置しとるんちゃうん？」
「買う方も買う方ですが、売る方も売る方ですね……」
「ささ、大関もすごいももデルカップも選り取りみどりや。早う帰って呑も呑も」
「えーっと……こんなに呑みます？」
「ええねん、余ったらドヤの共用冷蔵庫にでも突っ込んどいたらええ。気がつくと半分減ったりはしとるが」
「それ絶対誰かに呑まれてるじゃないですか……」
　時刻は既に十二時（てっぺん）を超えていたが、近隣住民のご近所迷惑などを考える地域柄でもない。女二人のうち特に一人はやかましくかしましく、もう待ちきれず呑み始めてしまったワンカップを片手に、薄暗い帰路へとついた。
「今宵は星がよぅ見えるな。オリオンさんもくっきりや」
「ヤス姐さん星座にも詳しいんですか、意外ですね」
「む、失礼な。あれがオリオンさんの左脇の下から生えてる三角形で、あれがオリオンさんに足蹴にされとる小動物で、あれがオリオンさんに襲いかかろうとする猛牛やろ？」
「冬の大三角、うさぎ座、牡牛座ですか。なかなかな覚え方してますね」
「むかーしまだおかんが生きとるうちにな、真夜中に家族三人で星座を見に行ったことがあるんや。奈良の若草山までおとんが車を走らせて、原っぱに大の字で寝そべってな。そん時におとんがベラベラ喋っとった内容が、ウチの星座に関する知識の全てや」
「なるほど……星座はヤス姐さんとお父様との思い出といったところでしょうか」
「そうそう、あの頃まだおとんがおとんをしとったからなぁ。若草山から眺めた星空はここと比にならんぐらいくっきり見えて、思わず幼心に心打たれてもうて……」

「感動しましたか？」
「そらもう、これこそ大阪市と奈良市が光源にかける金額の差なんやな、思うたら……」
「ちょっと、奈良出身の人が聞いたら怒りますよ」
「はは、冗談冗談」
　あいりんの塒までたどり着いた頃には入口の鍵も閉まっていたので、二人は開けっ放しの窓からこっそり侵入した。四畳半を灯す無味乾燥の白色電球だけが、おっさんの代わりとなって酔いどれた二人を迎え入れた。
「お嬢は何呑む？　ワンカップは大概呑んでしもうたから、デルカップしかあらんが……」
「深夜から呑む酒がこれでいいんですかね？　仕方ないんで一本もらいます……」
「ほな、乾杯しよか」
「あ、乾杯です」
　カップの瓶同士がぶつかり、心地よい音が響く。
「そうやな、ほいじゃあ明日も平日やから、テレビでも見ながらちびちびやって、眠くなったら寝る流れにしとこか」
「はい、そうですね」
　隙間なく敷いた二枚のセンベイ布団のうち入り口から見て左側を泰葉が、右側を公江が使うことに自然と決まった。泰葉がいくつかチャンネルを巡り、そこまで騒がしくもなく当たり障りも無いようなニュース番組が選局された。
「なんや、お色気系は今日やっとらんのか……なぁ、お嬢」
「どうしました？」
「その……今日はありがとな。こんなおばさんに一晩付き合ってもらって」
「どうしたんですか。ヤス姐さんの若々しさでおばさんなら、私も同じですよ」
「それでその、今のようなウチとお嬢の仲になったからこそ、言いづらくはあるんやけど……」
「なんですか、妙に歯切れの悪い物言いをしますね」
「お嬢、お願いがある」
「はい」
「明日、警察に自首しよう」

＊

どれぐらいの沈黙が滞留したのか、誰も分からないだろうし、誰も覚えていないだろう。
「えーっと……ヤス姐さん、何のことでしょう？　確かに私は不正経理に加担はしましたが、まだ監査も始まったばかりですし、後々どうなるかは分かりませんが、今すぐに警察のご厄介になるわけでは……」
「自分、今日ニュース見たか？」
「え？」
《……続きまして、朝からお茶の間を賑わせております。こちらのニュースに関する続報です》
「ニュース。今朝からどこのテレビ局も、この話題で持ちきりや。銭湯でも、弁当屋でも、たつ屋でも……」
「ちょっと待ってください。一体何の話を……」
《現在重要参考人として全国指名手配中の〇〇△△は、大阪市内で潜伏している可能性が非常に高いと見られ……》
「なぁお嬢。公開されているこの『〇〇△△』って人の顔写真やけど」
「……」
「髪型も、着ている服装も、目元も整形したのかだいぶ違いはあるかもしれへんが、どことなーく、誰かに似とるとは思わんか？」
「何言ってるんですか……私の名前は阿部公江だって、最初に……」
「一瞬見えたが、しっかり財布に入っとったで。免許証」
「ちっ……」
「おっと、いま素が出よったな。あいりんは偽名を使う人間も多いからなぁ。顔写真なしの偽造保険証ぐらいやったら業者に頼んですぐ作れたのに、ちいっとばかり準備が足らんかったなぁお嬢」
「しっ、しかし……」
《被害額はおよそ三億円と見られ、ネット上では平成の三億円事件として、大きな話題を呼んでおります》
「ほら、三億円ですよ。それだけの被害額となると、持ち運ぶこと自体私には無理です」
「ま、現金ならそうやろな。せやかてこのご時世、紙幣を持ち運ぶ泥棒の方が少ないやろ？　宝石、金塊、金券、色々手段はあるとは思うんやけど……実のところ、グラムあたりの単価が非常に高額で、一番持ち運びがしやす

いのは」
泰葉はキャリーバッグを指さした。
「あのカードやろ？　親戚の子に返す言うとったが、どうもとんでもないもん代物みたいやな。特にあの黒い蓮やと、ウン百万円は下らないんやってな」
「……意外とお詳しいんですね」
「銭湯屋の倅が昔遊んどったんで、今朝ついでに聞いてみたんや。貴金属と違って管理もしやすいし、一見するとただの古ぼけたカードやから、知らん人間には価値がさっぱり分からへん。ウチを含めてな。それにトレーディングカードっちゅう性質上使う人もおるから、人から人への行き来がしやすい。なかなかうまい手やと思うけど、これはお嬢が思いついたんか？」
「いえ……例の経理部長の趣味です」
「せやろな、ということは売上隠しのためちゅうことかな？」
「ま、その通りですね。いやー……はは」
わざとらしく発せられ乾ききったその笑いには、どこかほっとした安堵も含まれていた。
「一週間ぐらい潜伏するつもりでしたが、あっさり一日で明かされちゃいましたね。ご明察、流石ヤス姐さんです。それで、次はどうします？」
「で、ウチからの提案は、明日自首せえへんかちゅうらけや。別に強制する気もあらへんし、もう少し長居してもかまへん。それこそあいりんやったら一週間は気づかれへん。せやけど、潜伏すればするほど裁判では不利になる。逆に明日自首すれば、まだ情状酌量の余地があるかもしれへん。ウチはお嬢に、若い間の時間を大事にしてほしい。せやから……」
「どうしたいですか？」
「え……？」
「逆に泰葉さんは、どうしたいですか？　今すぐに私を通報しますか？　百万か二百万、おこぼれに預かりたいですか？　それとも……」
公江は古びたジャージのファスナーを、上から下までをすっと下ろした。薄いタンクトップが透けて、内側に潜む下着のレース柄が顕になる。
公江は過剰なまでに、汗をかいていた。

「……どうして？」
「すぐに分かりましたよ。お風呂の時、ずっと見ていたじゃないですか。泰葉さんにとってこの仕事の楽しみの半分は、あいりんに来た理由を聞くことだったみたいですけど、ひょっとしなくても残り半分はこっちなんじゃないですか？」
公江はわざとらしくポケットから取り出したスマホをいじる。
「どう思いますか？　あいりんに訪れた若い女性ばかりを狙って食い物にし、被害者は泣き寝入りするしかない『レズの紹介人』さん」
「どないして、そのことを……」
「インターネットは便利ですね。お隣さんが知らないことも、法人の名前で検索をかければ、レビューには全て書かれてますから。なんでも、お酒に睡眠薬を混入するのがお得意のようですね。ひょっとしたら、これにも」
公江はデルカップのグラスを傾け、その琥珀の液体を艶めかしく凝視した。
「もう何か細工されたりしていますか？」
「はははは……こら、一本取られたわ。晴れてお互いに犯罪者、ってわけやな。」
公江はデルカップの蓋を締め、ゴミ箱に放り込んだ。
「どうする？　一緒に自首でもしよか？　一昔前やとただの傷害未遂やったが、今なら強制性交等未遂で立件できるで」
中の液体がゴミ箱の中身に染み渡り、甘い匂いが部屋に充満する。
「さて、そろそろ寝ましょうか」
「……ほんまにええんか？　レズの強姦魔と添い寝するよりかは、西成警察署のブタ箱のが幾分安全やと思うが」
「別にいいですよ……そもそも」
公江はテレビのスイッチを消し、蛍光灯の紐を一度だけ引いた。薄暗い部屋の中、お互いの顔だけが浮かび上がる。
「そもそも、こんな薬なんかに頼らなくても別によかったんですよ。私にとっては男性との付き合いの方が、お試しみたいなものでしたし」
公江は半分脱がしかけていたジャージの上着を一気に

脱ぎ捨て、備え付けのタオルを一枚手に取った。
「それじゃあ私、少し汗を流しにシャワーを浴びてくるんで……んぐっ！」
次の瞬間、公江の唇から泰葉の冷たい舌を通じ、呑みかけの大関が無理やりねじ込まれていた。
荒々しく凶暴で、優しさの欠片もない接吻に対し、公江は反射的な抵抗を顕にしたものの、既に両手首を抑えられていたため、足を引っ掛けてバランスを崩した結果、センベイ布団の上に寝転がされていた。
泰葉はそのまま馬乗りになると、両手でタンクトップの首元を乱暴に握りしめ一気に胸元まで引き下ろした。緩くなった肩紐が伸び切ると両肘が拘束され、タンクトップの首元がいい塩梅に乳房の下へと食い込んで抜け出せない。他の女で何度も試したのであろう、その仕事ぶりはあまりにも手慣れていた。
ただ獣が贄を貪る、淡々と続く食事の時間。
そこには言葉も相互理解も無く、満たされるのは一方の愛欲のみ。
時折部屋から漏れだす喘ぎ声は、独り身である隣人の夜をささやかに慰めた。

＊

「なぁ、お嬢……もう起きとるか」
「……まだ寝てます」
あいりんの朝は早い。スズメがちゅちゅんと鳴く頃には、既にあいりん労働福祉センターは日雇いでごった返しているだろう。
「センベイ布団の上でピロートークっちゅうんも、色気もへったくれも無くて申し訳ないな」
「いいですよ……どうせ今夜だけの関係なんですから」
「なぁお嬢、お願いがある」
「なんでしょうか」
「もう少しだけ……ここにとどまってくれへんか。西成はアレやけど、新世界にはまだまだ見どころがあるで。天王寺動物園のトラ、国際地下劇場のピンク映画、昔ながらのスマートボール、それから車でも借りて、若草山の夜景でも見に行こな。ウチな、今はお嬢と色んな場所を回ってみたい」

「いや、特にいいです」
「乗り気やないんか」
「いや。泰葉さんってレイプした後で普通に優しく接するあたり、DV男の素質ありますよね……」
「なんやつれへんなぁ、もうヤス姉とも呼んでくれへんし」
「気が変わったんです。ちょっとトイレ行ってきますね」
「あ、お嬢。最後に一つ、頼みたいことがあるんや。聞いてくれるか？」
「後にしてくださいよ。ちょっと長いですから」
「さよか、ほいじゃ待っとるで」
はじめ泰葉はしばらくトイレに籠もったきりで外に出てこない公江を心配していたが、そのうちに睡魔が襲ってきたのでうとうとしてしまい、はっとして二度寝から目覚めると、既にキャリーバッグが部屋から姿を消していた。
ちゃぶ台の上には三千円と、書き置きで一言だけ残されていた。
「気が変わったんでお先に失礼します。やっぱり泰葉さんは、ここにさまよった人をフォローしてあげてください。またいつか」
泰葉の喉から、叫びにも似た苦しい嗚咽が漏れ出した。

＊

ひょっとしたらまたすぐに帰ってくるかもしれない、という泰葉の淡い期待もほんの三十分で潰えた。
泰葉はむしゃくしゃした癇癪を鎮めるべく、目的もなく外をぶらぶらと散歩していると、職安の前にできている人だかりがいつもよりも長引いていることに気づいた。
「取り壊しハンターイ！」
「ハンターイ！」
どうもただの日雇いだけでなく、あいりん職業安定所の取り壊しに反対するべく集った、日雇いの労働組合員も含まれている。
「なんや、取り壊すんかいな、ここ」
寝床が失われる人々には申し訳ないが、この古ぼけた街が少しずつ変化を遂げている様子を見て、泰葉は少しばかり気持ちが和らいだ。
「そういや来月には、ぼちぼち新元号も発表やったな……」

平成の暗部に取り残されたこのクソったれな街から連れ出してほしい、という泰葉の頼みも、結局公江まで届くことはなかった。
泰葉はポケットからボロボロの手帳を取り出した。
これはあいりんに今まで訪れ、泰葉と関係を持った女性を列挙したリストでもある。泰葉は出身地、好きな食べ物、血液型、性癖から行為の回数、恥ずかしいほくろの位置に至るまで綿密な記録を怠らなかった。既に彼女たちはあいりんを離れ、唯一人、泰葉だけが今も取り残されている。
泰葉は職安のパイプ椅子に腰掛けると、乾燥したボールペンの先を軽く舐め、筆を走らせる。彼女は公江（仮名）に関して覚えている情報を、忘れる前に書き込みながら呟いた。
「今回は、何がいかんかったんやろなぁ……」

甘い煙に誘われて

片桐天音 (@amane_katagiri)

strawberry 1

人が流れる歩道の中で、タバコの香りにつられてふと立ち止まる。

街を歩いていると、ときどきこんな風に甘い匂いが鼻をくすぐることがあった。甘く煙たいストロベリーの香り。普通に歩いていたら見過ごしてしまうような、そうでなくても数歩のうちに意識の外へ追いやられるような、かすかな心地よさが私の足を止めた。

私はこの匂いを知っている、と思った。鼻をすんと動かしているうちに、さっきまで食べていたサンドイッチの香ばしい匂いなんて全部吹き飛ばされてしまう。もやのかかった空気の中で、私は煙に包まれたあの頃の甘いひとときを思い出していた。

ぼんやりとした頭のまま、煙の立つ向きを探してゆっくりと辺りを見回す。昼休みのビル街は憩いを求める人でいっぱいで、後ろを急ぎ歩くサラリーマンが一人、軽く舌打ちをして通り過ぎていく。普段なら後ろから睨みつけながら舌打ちを返していたところだけど、今はただ生き急ぐ時間の流れを傍観する感覚に身を委ねていた。

おそらくこの甘い香りを漂わせているのは、そばにある喫煙所だろう。明るい緑色に塗られた柱に、上半分がフロストガラスで囲まれた半透明のシェルターは、彼らの身なりをそのままに顔だけを隠している。まるで犯罪者か風俗嬢みたいだな、と思う。

その区画のすぐ外で、出入り口近くの柱に寄りかかっている同い年くらいの女性が目に入った。片手に持ったスマートフォンを不機嫌そうに覗き込み、いらいらした様子を隠さない。

喫煙所は禁煙の波に追いやられた人でごったがえしていて、とりわけ奥はスーツ姿のおじさんばかりだ。きっと、大きな肩に挟まれた窮屈な空間でタバコを吸うのが嫌なのだろう。その気持ちは分からなくもないけど、マナーの悪い女だなと思う。

甘酸っぱいストロベリーフレーバーをくゆらせているのはこの人だ。

ウェーブのかかった茶色いロングヘアーにクールな瞳が隠されて、時折空を見つめながら煙を吐いている。サ

イケデリックなテディベアの写真が縦横にプリントされた趣味の悪いシャツに、くすんだ青のブルゾン。ライトブルーのデニムと紐の汚れた黒のスニーカーに寄り添うピンクのスケートボードは、そのフットワークの軽さを物語っている。およそ会社勤めには見えないし、下手をすると大学生ですらないかもしれない。

吸って、吐いて、画面をなぞる……その動きがいちいち気だるげで、あくせくと流れる時間から浮いて見える。

どうしてみんな、タバコを不味そうに吸うんだろう。まりっぺもそうだった。身体中にもくもくとした煙をまとって、そこから何が見えるのだろう。

その様子をしばらく眺めていると、彼女はまだだいぶ残った吸いさしを口から離して、足早に喫煙所の中へと向かっていった。頭一つ小さなデニムパンツが灰皿まで駆け寄って、吸殻を突っ込んでから出てきたと思うと、立ち止まっていた私に視線を向ける。慌てて目を逸らすけど、誰も寄せ付けまいとする視線は確かに一瞬私を貫いていた。

しかし、彼女は自分が観察されていることを意に介す様子もなく、スケートボードに乗って線路沿いの裏通りに消えていった。

ストロベリーの残り香が、少しずつ灰色の煙に追い出される。ぼんやりとした懐かしさがコントラストを失って、そのまま現実に戻されていく。彼女の痕跡はもう私の記憶にしか残っていないのに、どうしてか私はその場から動けずにいた。

どうしてだろう？　スケボーの彼女の視線に、まりっぺと同じものを――もしかしたら、まりっぺの面影を感じていたのかもしれない。私の隣では、いつもこの甘い匂いがしていたから。

secret 1

私がまりっぺの「秘密」を知ったのは、高校二年の冬のことだった。

今でもよく覚えている。寒さと暖かさが曖昧になった放課後の穏やかな日差し。柱の向こうから聞こえる砂利を踏みしめるさくさくとした足音。そしてあの、ストロ

ベリーの甘い香り。普段よりも少し強い風が、まりっぺの吐いた煙をそのまま私に届けてくれたのだ。

「ね、ねぇ赤沢さん？　それ、タバコ……だよね？」

「あら、C子だったの」

まりっぺは突然の邂逅に驚く様子もないまま、顔をちらと覗いてから私の名を告げた。誰か――つまり、私の気配はもう感じ取っていたらしい。火を着けたタバコを隠す様子もなく、軽く目を閉じてまた口元に運ぶ。細い芯の中を走る煙を優しく吸って、口からもくもくと吐き出した。

腰まで伸びたロングヘアは二つにまとめられていて、上を向いてふぅ、と息を吐くたびに、その動きに合わせてゆらゆらと揺れる。青みがかった煙が風に流されて、その綺麗なツインテールと混じり合っていくように見えた。煙がかき消えるとまたふわりと甘い香りが漂って、私の視界にぼんやりともやがかかる。

タバコってツンとした嫌な匂いのものばかりだと思ってたけど、こんなに心地いいなんて。いつものタバコが灰色の匂いだとしたら、これはまるでピンク色の匂いだ。

煙と一緒にゆったりとした時間が流れていく。それは窓際の机でまどろむ放課後よりも、駅のベンチで次の電車を待っているときよりも、もっとゆったりとしていておぼろげな時間だ。ずっと向こうに部活の練習風景が聞こえてきて、まるでここがいつもの学校から遠く離れた場所のように思えてくる。

そうして煙が消える様子をひとしきり眺めていたまりっぺは、しばらくしてから私に向き直った。

「それで、何か用？　さっさと先生に言いに行ったら？」

「ち、違うよ。私、そんなつもりで来たんじゃない」

もちろん、私が補習をサボってまで校舎裏に回り込んだのは偶然ではない。まりっぺの後ろ姿を追って歩いていたからだ。でも、決して彼女の喫煙を咎めるつもりで尾けていたわけではない。まるで路地裏をするすると歩く猫に導かれるように、奇妙な魅力が私を支配していたのだ。

姿を見せちゃいけない、と思った。尾行に気付かれたら、まりっぺが私をスパイとして疑うのは当然だったから。

それなのに、いつの間にか足が前に出ていた。甘い香

りにつられるように、格好悪く彼女の前に姿を表してしまった。それは、喫煙という意外な光景を目撃したせいでもあるだろうし、ただ彼女に私の存在を示したかったからかもしれない。私だけは味方だよ、とでも言うように。

「そう。別に、何でもいいけど」

壁に寄りかかったまりっぺが私を見下ろす。ふわりとしたスカートの裾が、薄い太陽の光で綺麗なグラデーションを作り出していた。

まりっぺ（当時は赤沢さんと呼んでいた）は、私のクラスメートだ。背の高いまりっぺのスカートから伸びた脚はすらっと長くて、廊下ですれ違うたびに目で追ってしまうくらい。歩く姿も美しくて、細やかな動き一つ一つにまりっぺの意識が込められているのが分かる。

同じ制服を着ているはずなのに、ちんちくりんの私とは何もかもが違う。背伸びすればやっと追い付けるくらいの意志の強い瞳が、整った顔の魅力をさらに高めていた。

「でも、どうしてタバコなんて……」

「吸いたくなったのよ。そんなに変？」

「だって、見つかったら退学だし」

「いいのよ、別に。高校なんて」

まりっぺはそう言って、またタバコを口にくわえた。

悪い事をしているはずなのに、彼女は逃げも隠れもせずに私の前に立っている。私を脅すわけでもなく、自分の「非行」を隠すわけでもなく、その姿はまるで駅前のカフェで紅茶を飲む時のように落ち着いていた。

どんな言い訳をしたって喫煙は喫煙だ。咎めなきゃいけない行為のはずなのに、今はその姿がなぜだかとても綺麗に見えた。

「タバコくらいで騒がないでよ。私のことなんて誰も見てないわ」

「……私、赤沢さんのタバコのこと、もう知ってるけど」

「脅しのつもり？　言ってるじゃない、高校くらいやめてもいいって」

鋭い視線が私を貫く。

高校くらいやめてもいい、なんて。私にはまりっぺの気持ちが分からなかった。高校進学を選んだ私たちの人生は、おそらく中卒なんて考えていられてはいないから。少なくとも、私にとってはそうだ。だから、まりっぺにも

そんな人生を送ってほしくはない、と思っていた。

でも、迷いも不安もないまりっぺの目を見ていると、その押し付けがましい親切心に彼女を巻き込むのが本当に正しいのか、分からなくなってしまう。

「そ、そうじゃなくて……」

「はっきりしなさいよ。これをネタにして、脅すつもりなんでしょ？」

これ、と言いながらまりっぺが火の付いたタバコを目の前に突き出した。まるで、常識に縛られた空っぽな自分を見透かされているような気がして、私は思わず目を逸らしてしまう。

私は彼女の視線から逃げるように、タバコの先から出る煙をじっと見つめていた。そうして黙ったままでいると、まりっぺは小さく溜息を吐いて、ブレザーのポケットからボタンの付いた黒い革のケースを取り出す。

「……もういいわ」

不機嫌そうなまりっぺは、彼女に似合わない無骨な携帯灰皿に吸い殻を押し込んで、そのままこの場から立ち去ろうとする。ざくざくとした足音がだんだん遠くなって、少しづつありふれた日常の空気が戻ってくるのを感じていた。張り詰めた空気が少しずつ緩んで、身体から力が抜けそうになる。

今何か言わないと、まりっぺはもう私を見てくれなくなってしまう、と思った。

「ち、違うよ！」

地面をぐっと踏みしめた勢いで、思わず大きな声が出てしまう。まりっぺが足を止めてから、これが秘密のやり取りなんだと思い出して、意味もなく口に手を当てる。振り向いたまりっぺと目が合って、彼女はふふっ、と小さく笑った。

「でも、もう学校では吸わないで」

「あら、学校じゃなきゃいいってこと？」

「うん。私……赤沢さんに、学校やめてほしくないから」

そう告げながら、私は思わずまりっぺの手を握っていた。突然距離を詰めた私に、まりっぺは戸惑いの表情で私を見つめるだけで、驚いた声さえも上げられない。

「ねぇ、赤沢さん。やめないで」

これは私のわがままだ。分かっていた。まりっぺが高

校をやめて困るのは、私の方なのだ。もし今日、校舎裏で彼女を見つけたのが私でなかったとしても、まりっぺには何も気にしないだろうから。まりっぺは、誰の救いも求めていない。まりっぺを救うふりをして、本当は私が救われたいだけなのに。

まるで、プロポーズでもした後のような長い沈黙が流れた。私の告白じみたお願いを、まりっぺはどう思っているだろうか。私の髪が揺らした風が、まりっぺのスカートも揺らしていく。その一瞬一瞬が恥ずかしかった。

「私のことは私が決めるわ。でも、C子が私を守りたいなら、勝手にして」

ひんやりとした手が心地いい。まりっぺはいつの間にか不意打ちに崩されたはずの冷静さを取り戻して、私をじっと見つめている。

「……うん。ありがとう、赤沢さん」

受け入れるわけでもなく、突き放すわけでもない。まりっぺらしいその答えが何度か私の頭の中を駆け巡って、やっと実感と共に私の顔を熱くする。まりっぺと私だけの秘密ができたこと。まりっぺと手を繋いでいること。私がまりっぺに受け入れられたこと。突然訪れた幸せが、私を包み込んで離さない。

結局、まりっぺが連絡先を交換しようと告げるまで、私たちはずっと見つめ合ったまま手を繋いでいた。まるで恋人みたいに。

まるで、恋人みたいに。

＊

校舎裏での出会いから数日が経った。昼休みの教室はざわざわとした取り留めのない会話で満ちていて、とにかく落ち着かない。年度末の浮ついた解放感がひしひしと伝わってきて、今の私には鬱陶しく感じられる。こういう微妙な気分のときには図書室に行くに限るんだけど、まりっぺとのこともあってなかなか動けずにいた。

教室でのまりっぺは、いつもと変わらず私の三つ後ろの席で静かにファッション誌を眺めている。教室に出入りするたびにちらりと彼女の方を見ていたけれど、目が合うことはなかった。私を信頼してくれているのか、それとも……本当に、高校をやめるつもりなのか。

いや、私はちゃんとまりっぺを守ると「約束」したんだ。まりっぺが学校をやめたりしないように。まりっぺの綺麗な姿を、私と彼女の静かな時間を、誰にも見せないために。だから、まりっぺがいなくなるなんてありえない。

でも、私はどうやってまりっぺを守るつもりなんだろうか。まりっぺに頼られたって、停学さえ覆すことはできないのに。できることなんて、タバコを吸っているときの見張り番くらい。私がまりっぺと一緒にいる価値があるのは、煙たくて気持ち良いあの場所にいるときだけ。私たちの関係は、密かに立つ煙と同じくらいに儚くて弱々しいのだ。

まりっぺは高校くらいやめてもいい、と言っていた。私の動きに関心がない様子を見ると、それは本当の気持ちなのだろう。でも、学校をやめてどうする気なのか、親にはどう説明するのか……そこまでは、現実味がなくてイマイチ想像が付かなかった。つまり、みんなが選ばないような生き方に向き合いつつあるまりっぺの後ろ姿が、少し怖かった。

「まりりーん。何読んでるの？」

そんな考えを巡らせながら窓の外を眺めていると、後ろから耳障りな声が聞こえてくる。こんな時でも、B子はやはりまりっぺに馴れ馴れしい。

「今月号のロルムよ。春の新作をチェックしてるの」

「えー、遅くない？　私、もうめぼしいのはいくつか買ってるよ」

「そうなの？　どこのブランド？」

「まぁ、――とか、――くらい？　そんなに追ってるわけじゃないけど、教えてあげよっか？」

「そうね、――は――だけど……私は――だから、別にいいわ」

同じクラスのB子は、性格の悪い女だ。気の強そうな顔に、わざとらしくてうるさい声。下品に着崩した制服は似合ってないくせに自信たっぷりで、自分が一番可愛いと思ってるのが透けて見える。まりっぺの足元にも及ばないくせに。

それに、まりりん、だなんて馴れ馴れしいあだ名を使うのだ。まりっぺと秘密の約束をした私でさえ、まだ名前さえ呼べていないのに。なんて図々しいやつなんだろう。

取り巻きとばかり遊んでいるから、他人との距離感も分からないのだ。

きっと、まりっぺだってうんざりしてるに違いない。

B子はまりっぺが怖いんだ。B子をちやほやしないどころか、自分に集まるはずだった視線さえも奪いかねないまりっぺ。そんなまりっぺが自分に見向きもしないとなれば、どうにか興味を引こうとするのかもしれない。所詮、まりっぺの魅力には勝てないのに。

そんなB子が上から目線でまりっぺに突撃していくのを見ると、腹が立って仕方ない。いつも周りにお友達を連れて楽しそうにしているんだから、そいつらと遊んでいればいいのに。

「でも、まりりんにはこういうのも似合うと思うよ。どう、これとか？」

「え、えぇ……ありがとう。参考にするわね」

いらいらする。後ろを向いてB子を睨みつけてやろうか。そう思いながら、解く気もしない問題集のページの端をこつこつとシャーペンで何度か叩いていると、芯がぱきりと折れてしまった。

「……はぁ」

でも、今は落ちてしまった小さな欠片に気をかける余裕もない。私は溜息を吐いてから、芯のないシャーペンをまたかつかつと紙に叩きつける。

おい、まりっぺが迷惑そうにしてるだろ。笑うな。喋るな。出てけよ。……今すぐ立ち上がってB子にそう突きつけることができれば、どんなによかったろう。でも、そんなことを叫んだら、まりっぺはどう思うだろうか。タバコを吸っていない彼女に、私は何ができるだろうか。

だって、私とまりっぺは灰色の糸で結ばれているのだ。手繰っているうちに広がって消えてしまいそうな、煙のように弱々しい糸で。不意に風でも起こしてしまったら、その糸はぷつりと切れてしまうだろう。それが怖くて席を立つことすらできずにいた。

「それでさー、まりりん。放課後、カラオケ行かない？今日は――と――と、あと――くんも来るんだけど」

「うーん……ごめんなさい。今日は家の用事があって」

「この前もそう言ってなかった？　せっかく誘ってるのにさ～」

それから、B子は仲の良い友達みたいにへらへらと二言三言発した後、「じゃあね、まりりん！」と言って教室を去っていく。

B子が退散するのを横目で見届けて、私は正直ほっとしていた。まりっぺの作り笑いを見たくないのに、私には見ていることしかできないから。静かに身を守ろうとしている自分のことを、じっと見つめていたくはなかったから。

＊

「私、赤沢さんのこと、やっぱ苦手だわ」

「Bちゃん、落ち着いて。ここ、一応学校のトイレなんだし」

B子はまりっぺにあしらわれた後、決まってトイレで取り巻きにまりっぺの悪口を吹き込むのだ。今日も例に漏れず、怒りに任せてまりっぺの悪口をあることないこと言いふらして、取り巻きその一に宥められていた。私は個室でその様子を聞きながら、じっとB子の愚かさを実感している。

「でもさー、私、仲良くしようとしてやってるんだよ？」

「Bは優しいなぁ。私、顔に出ちゃうからそういうことできないもん」

「あーゆーのは、どこに行っても一人だよ。マジでイタすぎ」

取り巻きその二におだてられて、B子は言いたい放題だ。顔は見えないけれど、その醜悪な表情は簡単に想像できる。まりっぺの孤独な様子を指差して、私たちは仲間でよかったねと確かめあっているのだ。まりっぺは自分で一人を選んでるのに。お前らみたいに群れる必要がないだけなのに。

B子は窘められたり煽られたりしながら、まりっぺの悪口を繰り返す。容姿のこと、ファッションのこと、嘘ばっかりだ。まりっぺのことなんて全然知らないくせに。

話しているうちにB子は興奮してきたのか、途中から「赤沢」と呼び捨てにし始めていた。「まりりん」だなんて寒気のする甘い声は全部演技で、こうやって取り巻きの前で調子に乗るのがB子の本性なのだ。

「ねぇ、C子！　あんた、赤沢のこと好きでしょ？」

と、突然B子に名前を呼ばれて、身体をびくつかせてしまう。いつの間にか尾行に気付かれていたらしい。彼女たちから私の姿が見えていないのは分かっていたけど、少しでも物音を立てたら動揺が悟られてしまうと思った。黙ってやり過ごそうと思いながら身体を縮こめていると、勢いづいたB子はさらに言葉を続ける。

「私が赤沢の悪口を言うの、いつも聞きに来てるよね。告げ口でもしてんの？」

「えっ……C子ってそうなの？」

「ねー、どうなの？」

まりっぺがお前らみたいな卑怯な真似をするわけがない。告げ口なんて頼まれるものか。根拠のないまりっぺの悪口に一つ一つ反論してやりたい気持ちはあったけど、三人を相手にはっきり自分の言葉を伝えるような勇気はなかった。

と、出るに出れない空気の中、突然ポケットの中で何かが震える。着信だ。気付かれないようにそっと携帯を取り出すと、通知欄が「赤沢まり」と白く光っているのが分かった。

【今日、付き合ってくれる？】

どうしてまりっぺからメッセが？　そうだ、この前連絡先を交換したんだった。突然の出来事に、少し混乱する。初めて私に送られた短いメッセージを何度も読み返しているうちに、まりっぺの「今日は家の用事があって」という言葉を思い出して、顔が熱くなった。

「ご、ごめん。ちょっと行かなきゃいけないから！」

私は個室の扉を開けると、いつの間にか走り出していた。後ろから聞こえる「おい、待てよ！」という声がなぜか滑稽に聞こえて、妙な笑いがこみ上げてくる。

お前らにまりっぺの魅力が分かるかよ。まりっぺのことを知ってるのは私だけなんだ。分かってあげられるのは私だけなんだ。心の中でそう唱え続けているうちに、B子のことなんか気にならなくなっていた。

nickname 1

それから私は、いろいろな場所でまりっぺの「非行」に付き合った。マンションの非常階段、人気のない公園の

隅、手入れされていない神社の裏――当然、そういう場所ではいつも二人きりだ。ネットで調べたところ、何度も同じ場所を使わないのがコツなんだという。場所選び以外に人目を避ける特別な対策はしてこなかったけど、幸いなことにこれまで喫煙の現場は見つからずに済んでいた。

夕日が当たる古い団地の屋上は、色々なものの時間が止まっている。建材はまだらに黒ずんでおり、所々に錆が流れ込んでマーブル模様を作っていた。雨が降ると隅に集まったごみがまた広がってしまうから、今日みたいな晴れ続きの日にしか使えない。コンクリートの床材や貯水槽の鉄骨が濡れていると、まりっぺは嫌な顔をした。

まりっぺの隣でリラックスしきれない私と、私の隣で悠々とタバコをくわえるまりっぺ。微妙に噛み合わない二人の間は、いつしか沈黙で満たされていく。私はそのぎこちない空気が初々しい恋人同士みたいで好きだったし、まりっぺも、そういう奇妙な静寂を楽しんでいたと思う。週に二度か三度は、こうして青春の黄昏みたいな時間を静かに過ごしていた。

まりっぺは、タバコを吸いながら私にいろいろなことを話してくれた。

「私、モデルになりたいの」

ロリータファッションが好きで、昔から自分で服を作っているらしい。既製服の可愛いポイントを取り入れつつ、高身長を活かしてオリジナリティを模索している、とか。ロリータのことはよく分からない。

今日は、裾にぐるりとチェリーが散りばめられた黒いワンピースだ。首元にはU字に大きく白いフリルが入っていて、金色のボタンがよく目立つ。大きなリボンはスカートと同じチェリー模様で、まるで綺麗な返り血みたい。ツインテールを留めるシュシュは服に合わせた白黒で、そこにストロベリーのチャームを添えてシックな色合いをカバーしている。

確かに、まりっぺのファッションへのこだわりはすごいと思う。私は動きやすいようにデニムとスニーカーで付き添ってるけど、まりっぺは何度言ってもふわりと広がるロングスカートだけは絶対に譲らないのだ。逃げやすさのことは二の次らしい。「見張りのあなたが動ければ、それでいいじゃない」なんて言われちゃったら、何も言

い返せない。

相槌を打ちながら、ぼんやりと横顔を眺める。夢の話に興じるまりっぺは、いつになく楽しそうだった。

「だから、本当は高校なんて行かなくてよかったのよ。でも、パパが許してくれなかったから」

まりっぺの夢を知ってもなお、せめて高校はちゃんと卒業するように言われたらしい。まりっぺがモデルになって失敗するわけなんかないのに。

どこも一緒だ。

母には、どこでもいいから大学は出ておいたほうがいいと言われていた。だから、私はその言葉を自分が立てた目標だと思い込みながら、なんとなく高校生らしい生活を送ってきたつもりだった。なんとなく行けそうな大学を選んで、それなりに勉強して合格する。夢とか人生のことはその後で考えても遅くない。それでなんとかなるはずだった。

そんな私が、今はまりっぺの隣で非行のお手伝いだなんて。

それにしても、モデルになるなら、なおさらタバコは吸わないほうがいいんじゃないだろうか。未成年喫煙のせいでミラクルティーンを降ろされたモデルもいるらしいし。

「私に指図しないで。タバコを吸ってるモデルなんて世界にはたくさんいるわ」

まりっぺはいらついた声でそう言ってから、いつもより少し長い吸い殻を灰皿にしまいこむ。普段ならもう一本という場面だけど、私が水を差してしまったせいで小休止となった。

怒っているかもしれない、という私の微妙な意識のせいで、この沈黙が苦しく感じられる。たぶんまりっぺはもう気にしていないし、ぐちぐち責め立てる気もないことは分かっているのに、心地いいはずの静かな空気が逆に私を締め付けていた。

「ご、ごめん……うん。赤沢さんなら、きっとなれるよ」

「うん、ありがと。嬉しいわ」

まりっぺは手持ち無沙汰な風に明るい水色のシガレットケースを弄ぶ。薔薇の刺繍をあしらったおしゃれなケースだ。古着をリメイクしたポーチやミニティッシュケー

スをいくつか持っていたから、これもおそらく手作りなのだろう。

「ねぇ、C子の夢は？　教えてよ」

ちょうどタバコを一本吸い終えて、まるで次はあなたのターンよとでもいうように私に向き直る。私の夢？　そんなの、このまま普通に高校に通って、卒業して……それから？　それから、私は何をしたかったんだっけ？

とりあえず申し込んだ進学希望者向けの補習には、彼女と「約束」したあの無断欠席の日からもう行っていない。最初から強い目的意識もなくだらだら通っていただけだから、足を止めるのは簡単だった。三回休んだあたりで担当の数学教師に呼び出されたから、進路を迷い始めたのでしばらく行けません、と伝えて後は知らんぷり。

悪い意味でただ前に進み続けていた私にとって、そういう嘘を吐くのは新鮮で、少し息苦しくもあった。でも、まりっぺの隣にいられるなら、もう受験さえもどうでもよかった。この瞬間は、確かに私の意志で選び取ったのだから。

いつの間にか、私の生活はまりっぺを中心に回っていた。自分の夢なんて考えるのを忘れてしまうくらいに。

でも、まりっぺはどうだろう。みんなの視線を集める世界的なモデルになって、颯爽とランウェイを歩く……そんな彼女の夢の中に、きっと私はいない。私は、テレビの前で彼女の凛とした姿に見とれることしかできないだろう。まりっぺに視線を送る大衆の一人として。

まりっぺが高校をやめてしまわなければなんでもよかった。あの時は、それが一番の目的だったから。でも、タバコだって、私たちはすぐに堂々と吸える年齢になる。そうしたら、私とまりっぺの「約束」は終わってしまう。喫煙を言い訳にして彼女に寄り添い続けても、必ず終わりが来てしまう。

「私は……まりっぺと一緒にいたい」

「ま、まりっぺ？」

「ねぇ、まりっぺ。まりっぺは、ずっとこうして私と一緒にいてくれるの？」

「落ち着きなさいよ。C子、痛いわ」

いつまでも一緒にいて、私を置いていかないで、私も連れていって……と心の中で叫んでいるうちに、ざらざ

らとしたコンクリートの床に手のひらが擦れる感覚がして、その痛みで我に返る。
「ねぇC子、あなた大丈夫？」
「うぁ……」
まりっぺが私を見下ろしていた。一方の私は、バランスを崩して尻もちをついたらしい。その拍子に手が擦れたのだ。まりっぺは自分の身体を抱くように立っている。じっと警戒する様子を呆けた顔で眺めているうちに、まりっぺの肩を強引に掴んでいたことを思い出した。
「ご、ごめんね……ごめん、赤沢さん。私ってば、なんてことを……」
焦りと混乱で動けない私は、へたりこんだままりっぺを見上げている。ちょうど夕日が沈む頃で、まりっぺの後ろから燃えるような夕焼けの光が差していた。彼女の脚から伸びた長い影が、私の上をぐにゃりと曲がって逃げていく。
「あなたの夢、訊いちゃいけなかった？」
「ち、違うの。ただ、私、怖かったから……」
心配そうに私の顔を覗き込む。怖かった、という気持ちに間違いはないけれど、きっとまりっぺには伝わらないだろう。彼女との将来を悲観していた、なんて。でも、それでよかった。まりっぺの邪魔になるような思いを伝える意味はないし、結果の分かっているような告白をしたくはなかったから。
まりっぺは少し首を傾げてから「それなら、いいんだけど」と言って、私に手を差し伸べる。そして、立ち上がった私にタバコを差し出した。
「夢なんて、すぐ見つかるわ。一本吸ってみる？　気分がよくなるわよ」
やっぱり、まりっぺには私が夢を見つけられなくて焦っているように見えたらしい。あながち間違っているわけではないけれど、こればかりはタバコを吸ってもどうにもならない。
まりっぺのタバコは、特別なタバコなんだという。タバコ屋さんでは手に入れられない特別なタバコだから、とっても美味しいのよ、と指を揺らす。
「特別、って？」
「特別は、特別よ。こうやって付き合ってくれてるあな

たも、特別よ？　特別だから、あなたにもあげるの」
私はタバコに詳しくないから、美味しいと言われてもよく分からない。でも、普通のお店で売ってもらえないのだから、当然誰かから譲ってもらうことにはなるだろう。だから、特別と言っても、単に協力者がどこかから仕入れてまりっぺに渡しているだけなんだろうなと思った。
でも、協力者って誰？
麻薬の売人というのは聞いたことがあるけれど、未成年にタバコを売り捌くのは、もっと違う存在だろう。まりっぺと仲が良くて、まりっぺが困った時に頼っているような、もっとプライベートな協力者――私よりも頭が良くて、頼りがいのある誰か。
革の携帯灰皿のことが頭をよぎった。まりっぺが、私以外の誰かに頼ってる？　そんなの、嫌だ。まりっぺとのさよならを覚悟しているはずなのに、私は「特別」という言葉に嫉妬していた。
彼女が気まぐれで与えてくれたこの時間のせいで、私以外にも向けられた「特別」に、どうしようもない敵対心を抱いている。まりっぺの「特別」は嬉しいけど、私だけの「特別」じゃない。抑えられない独占欲の自覚が、さらに私を惨めな気持ちにしていた。
「でも……」
改めて、まりっぺが差し出したタバコを見つめる。いざ吸い口を向けられると、非行をしているという現実感がどっと私に襲いかかってきた。
もちろん、彼女のタバコを見逃してあまつさえこうして今まで付き合ってきたことは、立派な非行だろう。でも、自分が本当にタバコに手を付けるところを想像すると、ドキドキして手の先が冷たくなった。まりっぺと同じ香りが身体中に巡る高揚感と、非行に手を染める興奮が一緒になって、太ももの辺りがぞくぞくとした。
「ま、そうよね」
そうして逡巡しているうちに、まりっぺは差し出したタバコを自分の口に戻してしまった。そして、くわえたタバコに火を付ける。私はライターを持っていなかったから。
「ほら、C子。こっち」
「ど、どうしたの、赤沢さ――ん、むっ！」

私を呼ぶ声に反応して歩み寄ると、まりっぺは私を優しく抱きとめて唇を重ねた。まりっぺの吐く息は甘くてピンク色で曖昧で、それだけでもう何も考えられなくなる。頭がストロベリーの煙で満たされていくうちに、目の前にいる彼女の表情はよく見えなくなって、今なら殺されたって分からないだろう。

何秒か、何十秒かそうしていた。小さく息をしているうちにふわふわとした煙の味が薄れて、徐々に夕日に包まれた屋上の風景が戻ってくる。その光景は、目を閉じる前よりもずっと綺麗だった。光がきらきらして、まりっぺの綺麗な髪の毛を一本ずつ彩っている。ぼんやりとした光の影の境目がぐっと伸びて、私と混じり合っていくように思えた。

「ふふ、美味しい？　これなら、吸ったことにはならないわ」

「ま、まりっぺ……ねぇ、もしかして、私のこと……」

もしかして、私のこと好きなの？　そんなおこがましい疑念をねじ伏せるように、まりっぺは優しく笑っていた。

「あら、ごめんなさい。電話みたい」

——と、まりっぺの携帯から、どこかで聞いたことのある洋楽の着信音が聞こえる。まりっぺはひらひらと手を振ってキスの中断を告げると、後ろを向いて誰かと話し始めた。一瞬ちらりと盗み見た画面には、「A子」という文字が流れていた。

A子？　うちのクラスにはそんな名前はいないし、まりっぺにきょうだいはいないはず。昔の同級生か、それとも幼馴染？　考えているうちに、顔から血の気が引いていくのが分かった。目の前にかかった霧がすっかり晴れて、意識が現実に戻ってくる。

「もしもし、A？　……うん、うん……ふふっ、なによ、それ。——」

じっと耳を澄ます。近況の報告とか、ファッション誌の話とか、夕ごはんのこととか。まりっぺは「A子」とそんなことを話していた。

薄く聞こえる声は確かに女のものだ。それで余計に腹が立つ。携帯灰皿の男以外にも、まだ仲のいい友達がいるってことだから。綺麗なまりっぺは、レベルの低い友達とは付き合っちゃいけないのに。B子とだってちゃん

と距離を置いてるのに。どうして？

待ってよ。こんなの、まりっぺじゃない！　まりっぺはもっと孤高で気高い存在なのに。

「C、ごめんね。ちょっと用事ができちゃった」

「う、うん。また……ね」

ねぇ、まりっぺ。Aって誰？　どうしてそんなに楽しそうに笑ってるの？　私には、そんな顔したことないじゃん。まりっぺにそう詰め寄ったって、彼女の笑顔が困惑に変わって、きっとそれだけ。もうどうしようもない。

まりっぺは私にくれたタバコの火を消して、手早く身支度を済ませた。そして「その傷、ちゃんと手当したほうがいいわよ」と言って私の手のひらを指差してから、足早に屋上を去っていく。

残された私は、その場に立っていることしかできなかった。まりっぺが与えてくれた優しさが、夕日と一緒に沈んでいく。ピンク色の興奮がじわじわと冷えていく。春めいた凍えるような夕暮れの中で、私の青春は終わりを告げた。

＊

まりっぺが退学した前後のことは、よく覚えていない。おそらく、私にとっては突然のことだった。新学期になるまでその事実を知らなかったのだから。結局、最後までまりっぺから別れが告げられることもなかった。

先生は家庭の都合と言っていた。それは本当のことかもしれないし、誰かが——私はその時B子を疑ったけど——まりっぺの「非行」について密告したのかもしれない。ただ、まりっぺの秘密を知っているのは私だけだったはずだから、そういう窃盗じみた侵害を信じたくはなかった。

まりっぺが退学しても、私以外の学校生活は問題なく回っているようだった。まりっぺを勝手にライバル視していたB子は喜んでいたようにも見えたし、悲しんでいるようにも見えた。トイレでまりっぺの悪口を言うことはなくなったけど、どちらにせよ、嫌なやつだ。

真実はどうあれ、それからまりっぺと会うことはなくなった。連絡先は知っていたけど、先延ばしにしていたら切り出しにくくなって、そのまま。まりっぺが私を疑っていたらどうしようと考えているうちに、昔のトーク履

歴を見るのさえ嫌になった。

まりっぺのプロフィールのアイコンが七回変わった。今まりっぺが何をしているのかは、もう分からない。

でも、一回だけまりっぺが口移しで与えてくれたあの味を、まだ忘れられずにいる。

甘い煙に誘われて 2

片桐天音 (@amane_katagiri)

nickname 2

まりっぺのことは、もう忘れたつもりでいた。突然私の前から姿を消した彼女のことを、いつまでも追い続けるわけにはいかなかったから。

あのとき、まりっぺはどうして私にさよならを言わなかったんだろう。私のことを嫌いになったんだろうか。

まりっぺは、最後に私をCと呼んでくれた。私が赤沢さんをまりっぺと呼ぶように、私をCと呼んでくれた。だから、半ば強引に参加させられたこの同窓会で、後ろから懐かしいあの声で「C」と呼ばれたとき、私の心は確かに四年前に戻っていた。

「あら、C、久しぶりね」

「……まりっぺ。どうしてここに？」

secret 2

まりっぺの部屋は、駅から十分ほどのアパートの三階にあった。振り向くと、細い道を挟んで背の低い一戸建てやアパートがひしめき合っていて、一歩踏み込むだけで誰かの生活とぶつかってしまうような狭苦しい気分になる。

もう辺りはすっかり暗くなっていたけど、歩いていてもすれ違うのは残業帰りのサラリーマンくらいしかいない。窓から漏れる黄色い光と、睨むように冷たく光る街灯が、疲れた顔を上からぼんやりと照らしていた。

この辺りはあんまり治安が良くないと聞いていたけど、今のところは閑静な住宅街に見える。

「そう？　住んでみれば、そんなに悪くないわよ。狭いのは慣れてるし」

「でも、暗くて危ないよ」

街灯はそれなりに整備されているとはいえ、建物と建物の間を縫うような細い道はやっぱり見通しが悪い。この川沿いの住宅街にたどり着くまで何度か路地を通り抜けてきたけど、まりっぺみたいな若くて綺麗な女の子が通り抜けるには、少々おぼつかない箇所もあった。

「あら、普段はちゃんと暗い道を避けて帰ってるわよ。でも今日は、特別だから」

「特別？」

「私のこと、守ってくれるんでしょ？　あの約束、もうおしまいなの？」

えっ、と思わず聞き返してしまいそうになる。あの約束、と言われて思い出すのは高校二年の冬のことだ。あの時もまりっぺは、確かに「特別」と言っていた。まるで魔法の呪文みたいに。

まりっぺが退学してから、私は彼女がくれた「特別」を忘れようとしていたけれど、どこかで同じくらい彼女に期待していた。私とまりっぺを結んでいた灰色の糸はもう切れてしまったはずなのに、彼女の呪文は私をずっと縛り付けている。もう一度まりっぺの「特別」になれるかもしれないと期待するだけで、もうそのことしか考えられなくなっていた。

「……そんなこと、ないけど」

だから今も、まりっぺがこうして遠い日の約束をちらつかせるだけで、私はそこから目が離せなくなってしまう。彼女と過ごした甘い日々がありありと思い出されて、何も言えなくなってしまうのだ。私が本当に彼女を守り抜けるかどうかには関係なく、ただ約束だけがそこにあった。

でも、彼女の特別は私にはよく分からない。私だけの特別じゃなきゃ、何の意味もなかったから。私にくれた特別と、誰かにあげた特別が同じなら、それは特別なんかじゃなかった。

「ねぇ、ちょっと」

と、私が下を向いて黙ったままでいると、突然まりっぺが私の横から身体を押し込んでくる。ツインテールがふわりと私の顔をなぞって、ヘアミストに包まれたまりっぺの甘い香りが鼻をくすぐった。その優しい不意打ちに、私は思わず後ろへ一歩、二歩……そのよろめくような動きが滑稽に見えたらしく、後ろを向いたまりっぺが小さく笑った。ほのかに光が漏れる。

「ま、まりっぺ、どうしたの？」

「どうしたの、って……そこに立ってたら、ドアが開けられないわ」

まりっぺは部屋の鍵を開けようとしていたらしい。いや、帰ってきたのだから当たり前だ。まりっぺが退屈そうにキーホルダーをもてあそんでいる横で、私は昔のことに夢中になってただ突っ立っていたらしい。慌ててま

りっぺの横に収まるように滑り込むと、程なくして重たい音と共にドアが開いた。

「少し散らかってるけど、適当にくつろいでちょうだい」

靴を脱ぐ。アパートの古びた外見とは裏腹に、１Ｋの小さな部屋はまりっぺらしさで埋め尽くされていた。

フローリングの上には左からベッド、ソファ、ガラステーブル、そして棚とその上に小さなテレビ。部屋の隅には大きな白いクローゼットと姿見が置かれていて、中にたくさんのドレスが入っていることが窺える。奥にはベランダに続く掃き出し窓があり、今はそこにジャガード調の柄がきらめくピンクの遮光カーテンが引かれていた。

棚やベッドに置かれたたくさんのぬいぐるみのせいで、散らかったような印象も受けるけど、淡い色で統一された室内はまさにまりっぺのお城という感じだ。そんなお姫様の部屋の雰囲気を仕上げるように、ローズアロマがほんのり香っている。

でも、その優しいフローラルの香りの後ろに、隠しきれないタバコの匂いがかすかに残っているのを私は見逃さなかった。床に、ソファに、壁紙に、かつてまりっぺがくゆらせていたような甘い匂いのものじゃなくて、ツンとした嫌な刺激臭を感じる。よく見ると、煙が染みているせいか、淡い花柄の壁紙の端が少しくすんで生活感を残していた。

別に、まりっぺがどんなタバコを吸っていようと私は気にしない。むしろ、新しいまりっぺの匂いを歓迎してしまうだろう。問題は、それが本当に「まりっぺの匂い」なのかということだ。まりっぺに感じていた男の影の正体を、私は結局確かめられずにいたから。

そして、まりっぺについてもう一つ気になることがあった。それは、彼女の舌にはまったピアスのことだ。食事の時から気になっていたけど、何度かその瞬間を見ているうちに確信した。笑うたびにちらりと覗く銀色の丸みは、かつてのまりっぺからは見つけられない明らかに異質な存在だった。ほのかに残るタバコの匂いが妙に頭に染み付いて、その穴さえも誰かが作った傷のように思えてくる。

まりっぺに刻まれている誰かの跡が、可愛らしく飾られた部屋や身体の中に隠れているのが分かる。私がまりっぺの恋人だったなら、口をこじ開けてでも確かめること

ができただろう。でも、今の私には、それが本当にピアスなのかを尋ねることすらできなかった。その傷が誰かに隷属している証だとしたら、私はもう立ち直れないだろうから。

「ソファ、座って。飲み物、コーディアルソーダでいい？」

「う、うん」

赤いチェックのトレイには、緑がかった琥珀色の涼やかなジュースで満たされたコップが二つ。からりと氷の音をさせながら、まりっぺは順番にコップを並べていった。

準備を終えたまりっぺが私の隣に座って、のどを鳴らしてソーダを半分ほど流し込む。私もそれにつられてコップに口を付けてみると、優しい花の香りと共にほのかな甘酸っぱさが口いっぱいに広がった。

＊

それから、私たちは色々なことを話した。高校のこと、大学のこと、専門学校のこと。新人モデルとして頑張っていること、就活がなかなか上手くいっていないこと。高校を去ったまりっぺは、東京で専門学校に通いながらモデルを目指しているらしい。

一方の私は、適当な大学に進んで人生を先送りにしているうちに、夢も人生も考えられないまま社会に出なければならなくなってしまった。高校を出なくても夢を叶えられる人はいるなんて、あの頃の私に言ったら信じるだろうか。大学に行っても夢を見つけられない人がいるなんて、あの頃の私に言ったら信じるだろうか。

まりっぺは、なぜかB子の話ばかり聞きたがった。私はB子のことなんてよく知らなかったし、思い出すのも嫌だったけど、まりっぺにとっては懐かしいクラスメートの一人でしかないのだろうか。あんな女のこと、どうして。

しかし、自分が勝手にライバル視していたまりっぺを同窓会に呼びつけて、B子は何をしたかったんだろう。前からB子は嫌なやつだとは思っていたけど、まさか大人になってまでそんな子供みたいな意地悪をするとは思わなかった。

と、部屋の前のコンクリートの廊下を歩く低い音が響く。ふと時計を見ると、もう日付が変わりかけていた。こ

んな夜遅くまで残業か、と思いながら声のトーンを落として通り過ぎるのを待っていると、まりっぺは逆にその足音に反応するように立ち上がった。

「あら、来たみたい。少し待ってて」

そう言って、まりっぺがチャイムも鳴らないうちに玄関に向かう。しかし、こんな時間に来るのは宅配便でも訪問販売でもない。私が「誰か来るの？」と尋ねると、まりっぺは振り向いてこう答えた。

「A子よ。後で紹介するわ」

＊

ずかずかと上がり込んできた女のことを、まりっぺは確かに「A子」と呼んだ。

「よっ、タバコ吸いに来たよ。……あれ？　誰、それ」

「友達よ、友達。来るなら先に言ってよね」

A子は喫煙所にでも来たような口ぶりで、まりっぺの部屋に上がり込んだ。手に持っているのはフィルムに包まれた新品のタバコだろう。深紅のパッケージの表面にはホログラムが貼られていて、動くたびに蛍光灯を反射して安っぽい黄色のきらめきを放っている。

A子。その名前には聞き覚えがあった。いや、忘れるわけがない。まりっぺと私の大事な時間を邪魔したA子。私からまりっぺを奪っていったA子。私から「特別」を奪っていったA子。

四年前のあの瞬間が、今目の前にまた現れようとしていた。

本当なら、まりっぺにA子との関係をすぐにでも問いただしたかったけど、今はまだその時じゃない。A子だって、思いがけない先客の私を見て何か思うところがあるだろう。もしかしたら、向こうから何か仕掛けてくるかもしれないし。

A子が靴を脱ぎながら、ピンクのスケートボードをドアに立てかける。まさか、ここまでスケボーで来たんだろうか。ロングの茶色いくせ毛を翻し、デニムと大きめのブルゾンで狭い道を駆け抜けるA子は、いかにもストリート系という感じがする。

やっぱり、まりっぺにはそんな子似合わない。

「ふーん。でも、マリーに友達なんていたっけ？」

A子の気だるげな視線が私に向く。品定めするようにゆっくりと私をなぞるその目は、敵とも味方ともつかない不思議な雰囲気を放っていた。

「友達くらいいるわよ。C子、ほら、高校の友達」

「C子、高校……あー……同窓会、結局行ったんだ。服、可愛いじゃん」

「えぇ、行ったわ。悪い？」

「別に悪くはないけどさ。どうせ、真面目ちゃんたちとは話が合わなかったでしょ？」

A子が壁に寄り掛かって、まりっぺにもゆっくりと舐めるような視線を送った。知らない私だからあんな視線を向けているのかと思ったけど、A子にはそもそも人をじろじろと見る癖があるらしい。悪い癖だなと思う。

同窓会の話は既に聞いていたようで、私のこともそこで会った同級生だとすぐに理解したらしい。それにしても、「真面目ちゃんたち」だなんて、随分知ったような口ぶりだ。まりっぺは、高校時代のことをA子にどう話したんだろうか。私のことや、タバコのこと……それに、B子のこととか。

「そんなことないわよ。Cにも会えたし」

「……あ、そ」

A子は短くそう答えると、もう話すことはないとでもいうように冷蔵庫の中を物色し始めた。しばらくすると酒がない、つまみがないと騒ぐA子の声がキッチンの奥から飛び出し、まりっぺもそれに応酬してごちゃごちゃとした口論を二、三繰り返す。

「あのね、そんなに欲しいなら、勝手にコンビニで買ってきなさいよ！」

「買う買う。途中にコンビニがあったらね」

それからまりっぺは、順番に私とA子の紹介を始めた。

私のことは高校時代の友達だと言っていたけど、タバコの話はしていなかった。一緒に帰るくらいの友達とか、なんとか。もしかして、A子はタバコのことを知らないんだろうか。そうだとしたら、A子はどうしてまりっぺが高校を辞めたと思っているんだろう。

A子。青山A子は新宿で働くフリーターだという。この近くに住んでいるらしい。たまに来るのよ、とまりっぺは迷惑そうに言っていた。わざわざタバコを吸いにく

るだけの仲なんて、まりっぺにも妙な友人がいるものだ。

「二人とも、なんだか気が合いそうね」

まりっぺは私とA子を交互に眺めながら、そう言って少し笑った。私には、どうにもそうは思えなかったけど。少なくとも、マリーだなんてダサいあだ名を使う女と一緒にはされたくなかった。

＊

自己紹介もそこそこに、まりっぺは「着替えてくるわ」と告げてバスルームに消えていった。残されたのは、まりっぺの身体を濡らすしっとりとしたシャワーの音と、互いの名前くらいしか知らない他人同然の二人だけだ。

「ソファ、座りますか？」

「あー、別にいいよ。床の方が落ち着くし」

ガラステーブルに頬杖をつくA子は、ラグの端にあぐらをかいて私に向かい合うように座っている。左手で画面をスクロールさせながらぼんやりとした視線でスマートフォンを眺めるその姿は、なぜか前に見たことがあるような気がした。

沈黙が流れる。テレビを点けておけばよかった。

A子は私に興味がないらしい。でも、私はA子のことをもっと知る必要があるのだ。A子にとってはSNSでもチェックしていれば過ぎ去るような暇な時間かもしれないけど、私にとっては彼女のことを見定めるための重要な時間だった。

手持ち無沙汰そうにもてあそぶタバコの箱が、いちいち光を反射してきらめいている。しばらくすると、A子はスマートフォンを捨てるように床に置き、タバコのフィルムに手を掛けた。

ぱちぱちと爪でフィルムを擦る音を響かせているところを見ると、どうやら開封テープの加工が甘かったらしい。A子は何度か包装をぐるりと見回した後、私の名前を呼んで枕元のペン立てを指差した。

「開かねーな。C子、そこにかみそり置いてない？」

「あ、はい……これですかね」

ペン立てにかみそりがあるのか、と思いながら赤紫の薄い柄を引き出すと、乳白色のカバーに包まれた刃が現れる。A子は短く「ん」と答えると、受け取ったかみそり

のカバーを外し、慣れた手つきでフィルムを切り取った。
A子はかみそりにカバーを戻し、そのままテーブルに置こうとする。すさかず私が「よかったら戻しますよ」と呼びかけると、A子はそれに応えて柄を握ったまま私にかみそりを差し出した。その不躾な刃を受け取りながら、視線を上に向けたA子と目が合うタイミングを狙って、私は本題を切り出す。
「あの……青山さんって、まりっぺの友達なんですか？」
「マリーの友達？　それ、どういう意味？」
質問に食いついた。フィルムを剥がす手が止まる。
私を見上げるA子の目は、突然の質問を受けて少しずつ怪訝な目つきに変わっていった。一瞬、シャワーの音が止まって、二人の間の沈黙がぐっと強くなる。
確かに、A子にとっては意味の分からない質問だろう。お前は友達なのか、なんて。でも私は、四年前のまりっぺが電話口で見せたあの笑顔の正体を明らかにしたかった。四年前も、そして今もまりっぺの隣にいるこの不良じみた女が、どうして「特別」なのかを確かめたかった。
「だから、まりっぺとはどういう関係なんですか？　まりっぺとは、いつ、どこで知り合ったんですか？」
「なにそれ。取り調べかなにか？　そんなに気になるなら、マリーに訊けばいいじゃん」
「はぐらかさないでくださいよ。言えないような関係なんですか？」
私の煽るような問いかけに、A子は眉をぴくりと動かして応えた。
「はぁ？　そんなわけないじゃん。夜中にいきなり尋ねても怒られないくらいの関係だよ。それ以上でも、それ以下でもない」
流石に私の追及がしつこいと感じたらしく、語調が少しずつ荒くなる。意図の見えない質問に苛立っているのが分かった。それからA子は、お前の好きにはさせないとでも言うように剥がれかけたフィルムをぐしゃぐしゃに破り捨て、ひったくるようにタバコを一本引っ張り出した。
威嚇するような荒い仕草に飲まれそうになるけれど、ここで引き下がるわけにはいかない。
「で、なんなのその質問？　意味分かんないんだけど」

「あの、友達なら友達って言ってくださいよ。もう一回訊きます。まりっぺとは、どういう関係なんですか？」
全く同じ質問に、A子がとうとう大きな溜息を吐く。苛立った彼女の表情が徐々に怒りを帯びていった。射るような目つきは荒っぽくて、繊細さの欠片も感じられなかったけど、その力強さはまりっぺと少しだけ似ていた。
「だから、なんだっていいじゃん。友達かどうかがそんなに気になるのかよ」
「気になりますよ。だって、私は――」
「……じゃあさ、恋人だったらどうすんの？」
恋人？　私の言葉を遮るように、A子がぽつりと呟いた。まるで取り留めのない雑談のように投げかけられた言葉が、私の心に大きな波紋を広げていく。
A子はすこぶる退屈だとでも言うように、指に持ったタバコをテーブルに放り投げて背伸びするように身体をのけぞらせた。そのゆったりとした動きを見ていると、余裕がないのは私だけのように思えてくる。
つまり、まるでこの女が本当にまりっぺの恋人で、その事実を知らない私だけが一人で大騒ぎしているような……そんなわけないのに。そんな――
「――こ、恋人なんて、そんなわけない！」
駆け巡る疑念に耐えきれずに、私は思わず立ち上がっていた。彼女の罠にハマったのだと気付いた時にはもう遅い。私を見上げて鼻で笑うA子を見て、私は負けた、と思った。もう目の前には、冷静なA子と感情的な私が向き合う滑稽な構図ができあがっていた。
「なんでだよ。C子だって、マリーが好きでここに来たんだろ？　私たちが付き合ってたっておかしくないじゃん」
まるで私の気持ちを知っているかのような物言いだ。そうやって、言い当てるふりをして動揺を誘っているのは分かっていたけど、一度崩れた態勢を整えるのは難しい。私の中の疑心暗鬼じみた想像が広がって、少しずつA子のペースに巻き込まれているのが分かった。
「おかしいですよ！　だって、そんなの……付き合ってるんですか？　好き、なんですか？　まりっぺのこと」
「好きだよ。好きだけど、だからなんなの？」
付き合ってるのか。そんなことを訊いたって、答えてくれるわけがないのは分かっていた。

友達だとか付き合ってないとか、A子はまりっぺとの関係を言い切るつもりはないらしい。なぜかは分からないけど、A子はそうやって何も知らない私をもてあそんでいるようにも思える。本当に性格の悪いやつだ。

しかし、私にもまた切り札があった。

「でも……無理ですよ」

「無理？　だから、なんでだよ？」

「だって、まりっぺは……」

だって、まりっぺは高校時代に男と付き合っていたんだから。タバコも灰皿も与えて、まりっぺに協力していたやつがいる。いや、今も付き合っているのかもしれない。まりっぺはたぶんその男と仲が良くて、だから、まりっぺはたぶん女の人とは――私たちとは――付き合わない。

はっきりそう言ってしまったら、余裕そうなA子も流石にショックを受けるだろう。だって、彼女は携帯灰皿のことを知らないはずだから。敵ながら心配になったけど、ここまで来たらもう言うしかない。

「だってまりっぺは、高校時代に男の人と付き合ってたんですから。女の人にそういう興味はないはずです」

私は落ち着いて、動揺しているのをこれ以上悟られないようにそう告げた。これでもう、A子の余裕は崩せたはずだ。

＊

「高校時代に、男……？　あぁ、もしかして……これのこと？」

「えっ……そ、それは……」

A子が掲げたのは、まりっぺが持っていたのと同じ形の、茶色い革の携帯灰皿だった。素材や縫製から見ても、同じブランドの色違いだろう。面食らった表情を隠せない私に、A子はさらに畳み掛けた。

「びっくりした？　確かにマリーはこれの黒を持ってるけどさ、あれは私があげたんだよ」

「え、あ……で、でも……」

息が詰まる。声が上手く出なかった。まるで追い詰められた真犯人みたいに。

でも、既製品の灰皿なんて同じものがいくらでも手に入るんだから、これがすぐに決定的な証拠になるわけじゃ

ない。偶然だってありえるし……自分の中でそんな言い訳をぐるぐると巡らせていたせいで、私の「切り札」がもはや切り札でないことに気付くまで、少し時間がかかった。

「マリーがダサい携帯灰皿を持ってるから、彼氏がいるって思ったの？　残念だけど、あいつにタバコを覚えさせたのは私、その携帯灰皿の彼氏は、私なんだよ」

けらけらと楽しそうに笑うA子。それは勝利宣言だった。随分と無骨な携帯灰皿だから、センスのない男がプレゼントしたものとばかり思っていたけど、まさかセンスのない女だったなんて！

「そっか、タバコの見張り役って、C子のことだったのか。マリーが吸ってたタバコって、これだろ？」

そう言うとA子はテレビの横のコスメ収納を漁り始め、その引き出しの二段目からストロベリーが描かれた白い箱を取り出した。箱はもう開封されていて、開けると既に何本か吸われているのが分かる。A子はその中から一本を取り出して、私に手渡した。

葉の間にほのかに香る甘酸っぱい香り。普通のタバコよりもきゅっと細く締まった芯。確かにこれは、私がまりっぺの「非行」に付き合っていた頃に吸っていたものだ。まりっぺはこの箱から何本か取り上げて、薔薇の刺繍を縫い付けた水色のケースに入れていたのだ。

「ストロベリーの香りがする輸入タバコだよ。ウチで特別に仕入れてる」

A子がストロベリーの箱からもう一本引き出した。火を着けて、吸って、息を吐く。テーブルからソファに広がっていくストロベリーの香りは、確かにまりっぺが私にくれたあの香りだ。私の中にじわじわと染み込む煙の味を感じながら、まりっぺが「特別」なタバコだと言っていたのを思い出していた。

遠い目をしたまりっぺが、上を向いてふわりと煙を吐き出す。あの光景が、眼前によみがえってくる気がした。

「あっはは、まっず！　やっぱ甘いのは不味いわ。笑えてくるほど不味い」

と、まるで目の前にまりっぺがいるようなその不思議な感覚は、A子の下品な笑い声で簡単に破られる。でもたまに吸いたくなるんだよね、なんて機嫌よさそうに笑いかけるA子は、そんな私の落胆を察するつもりもない。

部屋を何度もまりっぺの香りでいっぱいにして、私の自傷じみた妄想だけをいたずらに煽っていった。

A子の煙に染められたまりっぺ。まりっぺの服が、肌が、目が、少しずつくすんでいく想像が頭を離れない。

「も、もしかして――」

「ちょっと、A！　部屋では吸わないでって言ってるでしょ……って、なんでそれ吸ってるのよ」

もしかして、まりっぺの舌ピアスもA子が開けたの？と尋ねるより先に、頭にタオルを巻いたバスローブ姿のまりっぺが私たちの会話を遮った。

お風呂上がりの上気した肌に、むわりとした熱気がまとわりついて部屋に入ってくる。しっとりとしたシャンプーの香りが、ストロベリーの煙と混ざりあって、とろけるような甘酸っぱい香りに変わった。

「あー、ごめんごめん。C子が気になるって言うからさ」

「そ。なら、まぁいいけど。部屋ではやめてよね」

A子の適当な言い訳に、まりっぺはいったんその怒りを収めてみせた。そして、A子に聞こえよがしの小声で私に告げる。

「C、ごめんね。部屋がタバコ臭いの、この子のせいだから」

そうだろうな、と思う。男の影の正体は、もうA子なのだと分かってしまったのだから。壁紙の隅に染み込んだ、消しても消しても消えないA子の匂いを、まりっぺはどう思っているんだろう。私の前ではこうして気にするそぶりを見せるけど、もしかしたら、本当は。

それから、まりっぺはいったん収めた怒りをまた引き出すように、A子に向き直った。

「ほらほら、外で吸ってよね！　ここ、私の部屋なんだから」

rose 1

A子は不満げにぶつぶつ言いながらも、テーブルに放ってあった自分のタバコを取り上げながら立ち上がる。まりっぺの言うことはちゃんと聞くんだな、と思いながら、私もそれに倣って外に向かうことにした。まだ訊くことがあったから。

ベランダへ続く窓を開けると、部屋の中にこもった湿った雰囲気が冷たい空気と入れ変わるようにカーテンの外に出ていく。五月とはいえ、まだ夜は冷える。私の足元を冷ややかな風が駆け抜けて、口論で熱くなった頭が少しずつ落ち着いていくのを感じていた。

と同時に、まりっぺに感じていた男の影が、私が彼氏だと思っていたやつが、本当はA子だという事実が少しずつ私の中に広がっていく。苦いような、酸っぱいようなその感覚は、タバコの煙のように私に染み付いて離れない。

「早く閉めてよね。風邪引いちゃうから」

「はいはい……あ、C子、電気消してくれよ」

A子がベランダに一歩踏み入れた姿勢のままで振り向いた。その馴れ馴れしい指図にムッとしたが、まりっぺがいる手前で意地悪なことも言えまい。作戦とはいえさっきかみそりを取ってやったしな、と思いながら、テーブルの上のリモコンを何度か押した。

部屋の電気が消えて、カーテンの隙間から外の仄かな光が覗く。カーテンを引っ張ってくぐるように窓を抜けると同時に、都会のささやかな夜空の自然光と、向かい合う窓から漏れる少しばかりの人工光が私を迎えた。

私がベランダに出たのを確かめると、A子は後ろ手でからからと窓を閉める。そして、室外機の上の暗がりから何かを取り上げて、バランス良く手すりに置いた。なんだろうと思って顔を近づけると、くすんだ灰の匂いがする。

「部屋に灰皿を置くのはダサいんだってさ。だから、部屋ではこれ使うの」

A子は「これ」と言って、さっきの茶色の携帯灰皿を星空に重ねるように見せつけてから、そのままポケットにしまいこんだ。

準備が済んだA子は窓に寄りかかると、また赤い蛍を光らせて一服し始めた。すぐにそこら中がきついタバコの匂いで満たされていく。弱々しい星の光が煙に隠されて、灰色の空だけが残った。まりっぺの湯上がりの甘酸っぱい匂いも、少しずつ記憶の奥に追いやられていくのが分かる。

私の中のまりっぺが、少しずつ壊れていく。

だって、まりっぺは優しすぎるのだ。私だったら、こんな鼻の壊れた友人は作らないだろうから。身の程知らず

に上から目線で絡んでくるやつだって、真っ先に絶交するだろうから。

「C子は、タバコ吸わないの？」

「はい、吸わないですね。匂いが気になるので」

そう皮肉で返したけど、A子は「別に気にする必要なんてなくない？」と、伝わっているのか無視しているのか分からないような返事で私をいなした。

「じゃあ、これ。やるよ」

A子が取り出したのは、紫色をした丸い鉛筆のような細長い筒だった。手に取ると少し重たくて、表面のさらさらとしたラベル越しに金属の冷たい感じが伝わってくる。これは何かと尋ねると、A子は電子タバコだと言った。

「えっと、だから私、タバコはちょっと……」

「何も入ってないって。日本のだから。風味だけ」

A子はほら、と言ってその「電子タバコ」を目の前で吸ってみせた。A子が吸うのに合わせて先端が赤く光って、ふっと消える。

今度はA子が吐くのに合わせて甘ったるい香りが駆け抜けて、それから元のタバコの匂いで茶色く塗りつぶされていく。喫煙者が吸ってみせたって「何に入ってない」証明にはならないだろうけど、少なくとも今すぐ倒れるような危険な成分は入っていないようだ。

「これ、どう吸うんですか？」

「どう、って……吸うの、穴から。口で」

暗くて分からなかったけど、よく見ると十五センチほどの筒の片方に小さな穴が開いている。これが吸い口らしい。妙な感じだ。

ふーん、と思いながら吸い口をくわえて軽く息を吸い込むと、なるほど、バラの合成香料のような安っぽい甘さが口の中に広がっていく。少し煙たいけど、A子の吸うタバコのような刺激臭はない。さらに吸うと、先端がゆらゆらと赤く光っているのが分かった。

もやもやとした感じが気持ちいい。なるほど、タバコみたいに光るのかと思いながら先端を見つめているうちに、何だか気分が良くなってくる。

さらに強く肺まで吸い込むうちに、いきなり何かがパチッと弾ける音がした。

「ぐ、ぐはっ……げほっ！　げほ、げほっ……び、びっく

りした……」

「慌てて吸うなって。中学生かよ」

驚いた拍子に煙が変なところに入り込んで、次の瞬間私は大きく咳き込んでいた。あんまり強く吸うと、中で蒸気が弾けるのだという。そんなの聞いてない。

「でも、いい匂いだろ？　タバコを吸わないお子様にぴったりだよ」

「う、うん……」

急に咳き込んだのが恥ずかしくて、何だか気が抜けてしまった。私は電子タバコも上手に吸えないのか、と落胆とも諦めともつかない感情がぼんやりと頭を支配する。A子が私に皮肉を言ったのは分かっていたけど、なぜかやり返す気にはなれなかった。

優しく煙を吸い込むと、また甘ったるい香りが抜けていく。その感覚を確かめるように、私は何度も息を吸った。

舌ピアスのことは、訊かなくてももうなんとなく分かっていた。まりっぺにタバコを教えたのもA子、ピアスを開けたのもきっとA子なのだ。まりっぺはA子のもので、私が入り込むだけの隙間はもうなかったのだ。

私はまりっぺの隣にいる間、まりっぺに何かを残せただろうか。私がいなくなってからもずっと残るような、何かを。

「ねぇ、A子」

「ん？　どうした、急に」

「まりっぺのこと、よろしくお願いね」

まるで死期を悟ったかのようなせりふを聞いて、遠く夜空を見つめながらタバコをふかしていたA子が顔をこちらに向ける。しかし、別に私の余命を気にしているわけでもなく、ちらりと私の顔を見るだけで眉一つ動かさない。

「ふーん、そういう目もできるんだ」

友達を売るような真面目ちゃんのくせにさ。A子はそう言って、ベランダから去っていった。

＊

A子はひとしきりタバコを吸って満足したらしく、私がベランダから戻ってきた時にはもう部屋からいなくなっていた。

「おかえりなさい、C」
「あ……う、うん。ただいま」
まりっぺはもう、バスローブからレースをあしらった柔らかそうなボアのパジャマに着替え終わっていた。姿見の前で全身がピンク色のもこもこで包まれた自分の姿を確認しながら、時折裾をくいと少し引っ張ってフリルの形を整えている。
可愛いなと思うと同時に、まりっぺはもうA子のものなのか、とぼんやり考えていた。
「A、あなたに挨拶もしないまま帰っちゃったわ。あら、それ……」
そう言いながら、まりっぺが私の右手を指差す。その先に持っているのは、さっきA子がくれたローズフレーバーの電子タバコだ。返そうと思っていたのに、まるで嵐のようなやつだ。
まりっぺは一瞬怪訝な表情をしてから、すぐに嬉しそうに笑った。
「Aったら、よっぽどCのことが気に入ったのね」
A子が私のことを気に入った？　そんなふうには見えなかったけど。少なくとも私は仲良くするつもりはなかったし、A子だってそれには気付いていただろうに。
そんなことを考えながらソファに掛けると、まりっぺも私の隣に座った。
「じゃあ今日は、私もローズのタバコにしようかしら」
そう言うと、まりっぺは枕元から細長いピンクの箱を取り出した。そして、濃いピンク色の紙で巻かれたおしゃれなタバコを引き出す。ホログラムが巻かれた箱のきらめきはA子のと似ているけど、心なしかより上品な輝きに見える。
部屋で吸ってもいいのと尋ねると、今日は特別よ、と言って笑った。
「A、たまに来るのよ。寂しいのよね、きっと」
まりっぺの口元からふわり、と濃厚なローズの香りが漂う。でもその後ろには、確かにタバコの香りが潜んでいた。その甘い香りとは正反対のツンとした刺激を意識すると、嫌でもA子のことを思い出してしまう。
いい匂いのはずなのに、その後ろに隠れる影ばかりが気になっていた。

「ねぇ、C。私が女の子と付き合ってて、どう思った？」
その言葉をすぐに理解できたのは、その現実に薄々勘付いていたからだろう。きゅっと胸が締め付けられるような冷ややかな悲しみと一緒に、やっぱりそうなのか、という諦めが広がっていく。覚悟はできていたはずだけど、まりっぺの口から直接聞くとやっぱり苦しい。
「ど、どう……って？」
「だって、私のこと好きなんでしょう？」
でも、次の言葉は予想もつかないものだった。まりっぺは「違う？」と尋ねながら、私の顔を覗き込む。
私がまりっぺのことを好き？　まりっぺもA子も、どうしてそんなことをはっきり言うんだろう。私の気持ちを知ったような口ぶりで、私の前で、まるで私の代わりみたいに。
「好きじゃ……ないよ。ぜんぜん。もう、好きじゃない」
私は彼女に背を向けて、絞り出すようにそう告げた。好きじゃない。まりっぺのことなんか、好きじゃない。これはもう、本当の気持ちだった。だって、A子に染まったまりっぺなんて、もう。
執着しても、惨めになるだけだから。
A子。私の前に現れて、まりっぺをさらっていったA子。まりっぺを好きなだけ汚して、私に見せつけるA子。結局まりっぺも、まるでバカな女と同じように、あんな不良みたいなやつが好きなのか。私じゃ何が足りなくて、私じゃ何がいけなかったんだろう。
私だけのまりっぺが、がらがらと崩れていく。粉々になった「特別」の欠片が涙になって、私の目からぼろぼろとこぼれていった。頬を伝っていく涙を、まりっぺは掬うように撫でる。
「ねぇ、C。泣かないでよ」
「だって……だってまりっぺは！　タバコだって、ピアスだって、全部A子の言いなりなんでしょ？　私はまりっぺのこと、強くて可愛い女の子だと思ってたのに……そんなの、そんなの……ひどすぎるよ……」
「あら、ピアスってこれのこと？」
泣きじゃくる私を撫でる手が止まって、まりっぺがぺろりと舌を出す。その先には、確かに丸いピアスがはまっていた。やっぱり、そうだ。存在感を強烈に主張するその

傷を見て、勝手に涙があふれてくる。
　私は声に詰まって何も言えずにただ頷くと、ところがまりっぺは、不満げな顔で私に向き直った。
「何言ってるの？　違うわよ、私は誰かに身体を傷つけさせたりしないわ」
「で、でも青山さんは……」
「私のことは私が決めるって言ったでしょ？　むしろAは反対してたわよ。あの子、すごく勝手なんだから」
　まりっぺのピアスは、A子が開けたものじゃない？　じゃあ、まりっぺが自分で決めたの？　そうだとしたら、私は大きな勘違いをしていたらしい。舌にはまった丸い銀色が急に美しい輝きに思えてきて、私はその口元から目が離せなくなっていた。
「だってあの子、太ももにタトゥーがあるのよ？　だったらピアスくらい、別にいいじゃない。温泉だって入れるんだし。そう思わない？　舌が痛いって言うけど、そんなの別に――」
「ま、待ってよまりっぺ！　じゃあ、そのピアスは自分で開けたってこと？」
　A子の不満をつらつらと並べるまりっぺの言葉を遮ると、彼女はきょとんとした顔で私を見つめる。
「だから、そう言ってるじゃない。私は誰のものにもならないわ。Aのことは好きだけど……C子、あなたのことだって、好きだもの」
「ま、まりっぺ……やめてよ、そんなの……」
　嬉しいはずの告白に、私は何故か拒否感を覚えていた。
　私はもうまりっぺを諦めると決めていたはずなのに、まりっぺが私に希望という毒を注入していく。私は誰のものにもならない。あなたが好き。そう言ってのけるまりっぺの意志の強い瞳が、また私の心を捉えて離さなくなる。
「だって、まりっぺはA子と付き合ってて、だから私はもうまりっぺを諦めるしかないんだよ？」
「でも私、Cのことが好きだわ。Aのことも、Cのことも」
　まりっぺとの別れを決めたはずなのに、彼女に好き、と言われるたびに顔が熱くなるのを止められない。それに、いつの間にかローズの甘ったるい香りばかりが私の鼻をくすぐっていた。
　A子のタバコ。A子がまりっぺを汚したタバコ。ツン

として臭いはずなのに、もう私はその刺激を嗅ぎ分けることができなくなっていた。少しずつまたあの「特別」への渇望が、私の中にむくむくと頭をもたげているのが分かった。
「やめて、やめてよ！　まりっぺ……なんで、諦めさせてくれないの……おかしいよ、こんなの……」
「ねぇ、C？　私のこと、ずっと好きでいてね」
　微笑むまりっぺと目が合う。
　私はまりっぺに恐怖していた。いや、正確には、私自身に恐怖していた。彼女を求めるのを止められないこの感覚が、もがいたってもう逃げられないと諦めかけているこの感覚が、そしてこの恐怖さえも、まりっぺの前でなら心地よく感じてしまうこの感覚が、怖かった。
「言ってよ。ねぇ、まりっぺ！　A子にピアスを開けろって言われたって、言って、言ってよ……ねぇ……」
　めちゃくちゃなことを言っているのは分かっていた。でもまりっぺは、すがりついて泣きじゃくる私を引き剥がすでもなく、抱きしめてキスをしてくれるわけでもない。ただ、そのまま。
　私が睨むようにまりっぺを見上げると、彼女はちらと舌のピアスを見せつけるように小さく笑った。
「う、うぅ……ねぇ、まりっぺ、好きだよ……だから……」
　私はまりっぺのこと、何も分かっていなかった。彼女はもう、私を縛って離さないつもりなのだ。この恋はもう、自分で終わらせることもできないのだと悟った時には、もう遅かった。
　そんな不釣り合いな私たちを、ローズの甘くて煙たい香りが優しく包み込んでいる。まりっぺが与えてくれるこの味は、こうしてずっと私を縛り続けるのだろう。私の恋が寂しく終わろうとも、きっと、ずっと。

ここから「flowline flower」の感想をお聞かせください！

または、https://forms.gle/d8zfmpGApGj9jZGXA

書名 ..... flowline flower
発行日 2019/05/06
発行 ..... 変態美少女ふぃろそふぃ。
印刷 ..... 変態美少女ふぃろそふぃ。出版部
連絡先 ..... circlemaster@hentaigirls.net

表紙イラストと「土手の魚」を除く全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

To the extent possible under law, 野沢菜 and 片桐天音 have waived all copyright and related or neighboring rights to cover image. This work is published from: 日本.
:comet: https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/2604.svg and :cherry_blossom: https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/1f338.svg emojis used in cover image are licensed under a CC BY 4.0 by Twitter, Inc and other contributors.

To the extent possible under law, 野沢菜 has waived all copyright and related or neighboring rights to 土手の魚. This work is published from: 日本.

変態美少女ふぃろそふぃ。